

令和5年度

南信州・飯田フィールドスタディ報告書

令和5年8月9日（水）～12日（土）

目 次

事業概要	・・・P.1
参加者名簿	・・・P.2
カリキュラム	・・・P.3
参加者アンケート	・・・P.4
振り返りレポート	・・・P.15

令和5年度 南信州・飯田フィールドスタディの概要

- テーマ 市民・行政が協働したまちづくりはどのようにして生まれるか

- 開催期間
事前学習：令和 5年 7月 18日（火曜日）18：30～
現地学習：令和 5年 8月 9日（水曜日）（集合：13：00 飯田駅前ムトスぷらざ2階）
～8月 12日（土曜日）（解散：正午※予定）〔3泊4日〕
※解散時間は概ねの目安で、若干前後する可能性があります。

- 開催方式
事前学習：ウェブ会議（Zoom）による
現地学習：長野県飯田市内

- 対象者
まちづくり、地域コミュニティに関心を寄せる大学生

- 主なプログラム
まちづくりに携わる者と対話する（市長、住民、行政職員等）
飯田における自治の仕組みを学ぶ。
飯田のまちづくりの現場を訪ねる。
参加学生・参加教員との議論を通じて理解を深める。
※詳細は別紙プログラムを参照

- 募集人数
30名程度
※申込者多数の場合は先着順での受付となります。

- 参加費
33,000円（当日集金）
ホテル（シングルルーム、朝食付）の宿泊費、市内移動費、資料費、保険代（最大：死亡後遺障害 1,000万円、入院 4,000円、通院 2,500円補償）を含みます。
※参加者の居住地から飯田市への移動費等は、別途必要になります。

- 申込方法
学輪 IIDA 事務局（飯田市大学誘致連携推進室）へメール、電話等でお申込みください。
○飯田市企画部大学誘致連携推進室 担当：下平 一博
所在：395-8501 飯田市大久保町 2534 番地
電話：0265-22-4511（内線 2251） FAX：0265-53-4511
e-mail：idaigaku@city.iida.nagano.jp

2023南信州・飯田フィールドスタディ プログラム

期日：8月9日(水)～8月12日(土) 3泊4日

参加費：33,000円(ホテルシングルルーム宿泊、保険料、移動経費、資料代、食事代を含む)※8/11(金)夕食のみ各自

テーマ：市民・行政が協働したまちづくりはどのようにして生まれるか

講師：大阪観光大学 小畑カ人先生、追手門学院大学 大串恵太先生

日程					内容	講師	場所
日にち	パート	開始	終了	時間(分)			
7/18(火)	事前学習	18:30	20:30	120	オリエンテーション 飯田についての基礎学習	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生 飯田市職員	zoomミーティング
1日目 8/9(水) 土儀設定	受付	13:00	13:30	30	参加費を集合します		
	オリエンテーション	13:30	14:30	60	オリエンテーション	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生	
	休憩、講義受講準備	14:30	14:40	10			
	飯田のまちづくりの仕組み 市民の協働の理解	14:40	15:20	40	「飯田のまちづくりの特徴と仕組み」	地域自治振興課 羽場自治振興センター所長 前澤 英明 さん	
	市民-行政をつなぐ公民館	15:20	16:00	40	「飯田市の公民館の特徴と役割」	飯田市公民館 主事 三ツ井 洋樹 さん	ムトスぶらざ 2階多目的ホール
	休憩	16:00	16:10	10			
	公民館主事(08/06含む)との 意見交換	16:10	17:10	60	「飯田の行政職員の意識を語る」	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生 飯田市職員	
	休憩	17:00	17:30	30			
	グループワーク1	17:30	18:30	60	1日目の振り返り (ワーク・ポイント整理)	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生	
	移動	18:30	19:00	30	徒歩		
夕食交流会	19:00	20:30	90	飯田の焼肉交流会		信濃屋(中央通り店)	
(入浴・就寝)						ホテルオオハシ	
2日目 8/10(木) 市民の 当事者意識	集合		8:30				
	オリエンテーション	8:30	8:45	15	オリエンテーション	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生	ムトスぶらざ 2階多目的ホール
	現地視察	8:45	9:30	45	りんご並木周辺の散策	飯田市職員	りんご並木周辺
	市民が主役の活動	9:30	10:30	60	「りんご並木まちづくりネットワークの取組」	りんご並木まちづくりネットワーク コーディネーター 桑原 利彦 さん	橋南公民館 会議室1、2
	休憩	10:30	10:45	15			
	市民が主役の活動	10:45	11:45	60	「いいだ人形劇フェスタの取組」	いいだ人形劇フェスタ実行委員会 実行委員長 原田 雅弘 さん	橋南公民館 会議室1、2
	昼食	11:45	13:30	105	ランチ会食		TESSHIN
	移動	13:30	13:45	15	タクシー		
	現地視察	13:45	14:15	30	喜久水酒造の酒蔵見学	菊水酒造株式会社 取締役営業部長 後藤 高一 さん	喜久水酒造
	市民が主役の活動	14:15	15:30	75	「多様な主体の協働によるシードルの六次産業化の取組」	NPO法人国際りんご・シードル振興会 後藤 高一 さん	喜久水酒造会議室
	グループワーク2	16:30	18:00	90	2日目の振り返り	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生	ムトスぶらざ 2階多目的ホール
	夕食	18:00	18:40	40	お弁当		
	移動	18:40	19:00	20	徒歩		
現地視察	19:00	20:30	90	地域の会議の現場に触れてみよう りんご並木まちづくりネットワーク (中心市街地活性化に向けた市民ネットワーク会議の見学・参加)		橋南公民館 会議室1、2	
(入浴・就寝)						ホテルオオハシ	
3日目 8/11(金) 市民-行政の 協働	集合		9:00				
	オリエンテーション	9:00	9:15	15	オリエンテーション	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生	ムトスぶらざ 2階多目的ホール
	環境領域での実践現場	9:15	10:15	60	「飯田の環境政策について」	飯田市ゼロカーボンシティ推進課 地域エネルギー政策係長 小林 晋 さん	
	福祉領域での実践現場	10:30	11:30	60	「子育て支援の取組、おしゃべりサラダの活動」	NPO法人おしゃべりサラダ 代表 松村 由美子 さん	
	昼食	11:30	13:30	120	ランチ会食		満津田食堂
	観光領域での実践現場	13:30	14:30	60	「本物体験！南信州観光公社の取組」	南信州観光公社 代表取締役社長 高橋 充 さん	ムトスぶらざ 2階多目的ホール
	現地視察	14:45	16:15	90	和菓子探訪 (2グループに分かれて和菓子屋巡りおよび市街地散策)	南信州観光公社のガイドの方	中心市街地
	グループワーク3	16:30	18:30	120	3日目の振り返り	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生	ムトスぶらざ 2階多目的ホール
夕食				各自			
(入浴・就寝)						ホテルオオハシ	
4日目 8/12(土)	集合		8:30				
	グループワーク4	8:30	10:00	90	発表準備	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生	ムトスぶらざ 2階多目的ホール
	発表会	10:00	11:30	90	成果発表会	大阪観光大学 小畑カ人 先生 追手門学院大学 大串 恵太 先生	
	閉講式	11:30	12:00	30	閉講式		

南信州・飯田フィールドスタディ2023 参加者名簿

■参加学生

No.	氏名	よみ	大学名	学部・専攻	学年	出身地	備考
1	高柳 壱	たかやなぎ いち	長野県立大学	グローバルマネジメント学部	3	沖縄県宮古島市	
2	手塚 英里	てづか えり	長野県立大学	グローバルマネジメント学部	3	長野県上田市	
3	二木 鈴花	ふたつぎ りんか	長野県立大学	グローバルマネジメント学部	3	長野県安曇野市	
4	加藤 旺樹	かとう おうき	摂南大学	現代社会学部	1	福井県鯖江市	
5	宮崎 希実	みやざき のぞみ	摂南大学	現代社会学部	1	奈良県河合町	
6	宮本 まなか	みやもと まなか	摂南大学	現代社会学部	1	大阪府大阪市	
7	今津 百伽	いまづ ももか	摂南大学	現代社会学部	1	兵庫県神戸市	
8	山本 彩夢	やまもと あのん	摂南大学	現代社会学部	1	大阪府堺市	
9	小溝 柊汰	こみぞ しゅうた	立命館アジア太平洋大学	サステイナビリティ観光学部	1	福岡県北九州市	
10	高橋 脩	たかはし しゅう	立命館アジア太平洋大学	サステイナビリティ観光学部	1	埼玉県さいたま市	
11	野村 航平	のむら こうへい	立命館アジア太平洋大学	サステイナビリティ観光学部	1	愛知県知立市	
12	山本 琉慎	やまもと りゅうしん	立命館アジア太平洋大学	サステイナビリティ観光学部	1	大阪府寝屋川市	
13	吉岡 輝	よしおか ひかる	立命館アジア太平洋大学	サステイナビリティ観光学部	1	福岡県福岡市	
14	金 叡花	きん いえひな	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	2	京都府京都市	
15	倉地 亜子	くらち あこ	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	2	北海道室蘭市	
16	鳥居 なの葉	とりい なのは	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	2	京都府京都市	
17	横田 理紗子	よこた りさこ	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	3	東京都豊島区	
18	大川 侑菜	おおかわ ゆうな	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	4	大阪府豊中市	
19	西村 仁	にしむら じん	立命館アジア太平洋大学	国際経営学部	4	神奈川県川崎市	
20	古 瑞騰	こ ずいどう	大阪観光大学	観光学部	3	台湾	
21	高 娜娜	こう なな	大阪観光大学	観光学部	4	中華人民共和国	
22	師 嘉楽	し からく	大阪観光大学	観光学部	4	中華人民共和国	
23	謝 海波	しゃ かいほ	大阪観光大学	観光学部	4	中華人民共和国	
24	李 雲鵬	り うんほう	大阪観光大学	観光学部	4	中華人民共和国	
25	李 琪	り き	大阪観光大学	観光学部	4	中華人民共和国	

■参加教員

No.	氏名	よみ	所属等	備考
1	後和 美朝	ごわ よしあき	摂南大学 教授	
2	土橋 卓也	つちはし たくや	立命館アジア太平洋大学 教授	
3	胡 飛瑜	こ ひゆ	立命館アジア太平洋大学 准教授	
4	草郷 孝好	くさごう たかよし	関西大学 教授	8/9.10オプザーバー参加

■講師

No.	氏名	よみ	所属等	備考
1	小畑 カ人	おばた りきと	大阪観光大学 教授	
2	大串 恵太	おおぐし けいた	追手門学院大学共通教育機構 特任准教授	

■事務局

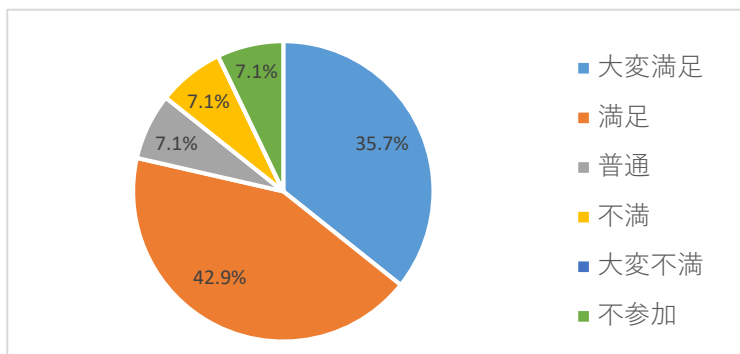
No.	氏名	よみ	所属等	備考
1	加藤 博文	かとう ひろふみ	飯田市役所大学誘致連携推進室	
2	下平 一博	しもだいら かずひろ	飯田市役所大学誘致連携推進室	
3	小島 一人	こじま かずと	飯田市役所大学誘致連携推進室	

令和5年度 南信州・飯田フィールドスタディ 参加者アンケート まとめ

問1 参加大学別人数（アンケート回答者数）

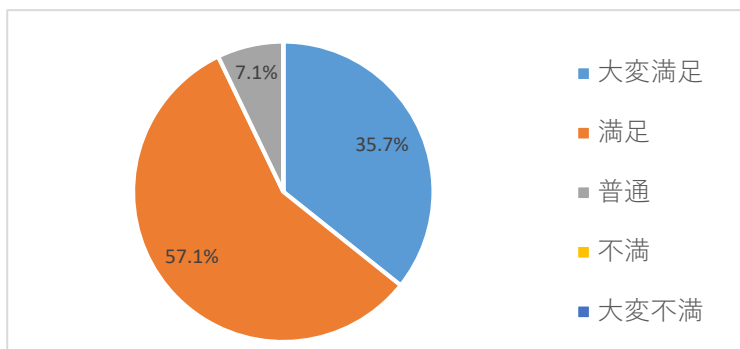
・大阪観光大学	9（1）名
・摂南大学	5（4）名
・長野県立大学	3（2）名
・立命館アジア太平洋大学	11（7）名

問2 7/18 [事前学習]



- ・情報が充実したパワーポイントと共に紹介していただき、勉強になりました。グループワークで、飯田市の印象を共有した際にも、県外の人からの印象を初めて知り、興味深かったです。
- ・背景知識があった上での実習は理解がしやすかった。
- ・事前学習にちょうど良いボリュームでした。
- ・飯田市の概要を詳しくしれた。
- ・飯田市の歴史や産業など基本的なことを知ることができた。
- ・ある程度知識を入れることができた。
- ・毎日の講義内容が充実しています。各業界の豊富な経験が聞かれ、体験できたことがうれしいことだと思います。
- ・少し飯田市の説明が長かった。もう少しコンパクトだといいと思います。
- ・前置きが長かった。会議の時間を考えて欲しかった。
- ・海外留学中のため参加できませんでした。

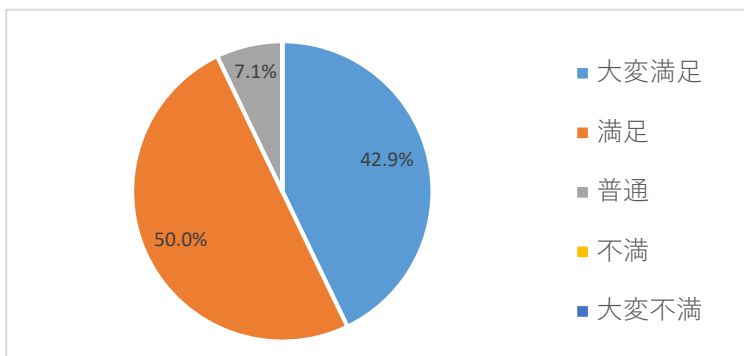
問3 8/9 [オリエンテーション]



- ・3泊4日の短いプログラムのなか、内容が充実していたと感じています。

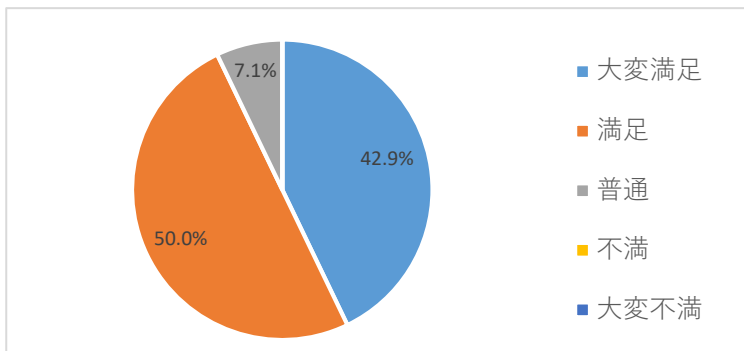
- ・疑問点をいくつか絞ってわかりやすく書き出せるように配慮していただき、後の振り返りに役立ちました。
- ・何を学んだらいいか目標を決められた。
- ・場が和み良い雰囲気スタートできた。
- ・みんな優しくて積極性があった。
- ・緊張はしたけど、他の学生と関われる機会をつくってもらえたので良かった。
- ・最初は緊張していたが、アイスブレイクで他の参加者の方と仲良くなれた。
- ・参加者同士で交流できた。
- ・毎日のスケジュールが時間帯ごとに計画されたことがとても良いと思います。時間を無駄にしていま
せんでした。
- ・人形劇フェスタや市民が企画したお祭りなどに実際に参加したかった。

問4 8/9 [講義1] 「飯田のまちづくりの特徴と仕組み」 地域自治振興課 前澤英明さん



- ・まちづくりとはなにか概要を知ることができた。
- ・飯田についての基本知識をおさえることができた。
- ・飯田市の街づくりの特徴が簡潔に整理されていて、学生にわかりやすかったと思います。
- ・飯田市の仕組みについて分かりやすく説明されていてよかった。
- ・歴史的な流れと共に、飯田市の特徴を最初に再確認でき、後日の学びの基礎知識ができました。
- ・わかりやすくて、理解できました。
- ・行政側からのまちづくりの仕組みを学ぶことができた。
- ・飯田市にしかない良さがしれた。
- ・飯田市の概要を知れた。
- ・飯田市のまちづくりの特徴や、公民館活動について知ることができた。

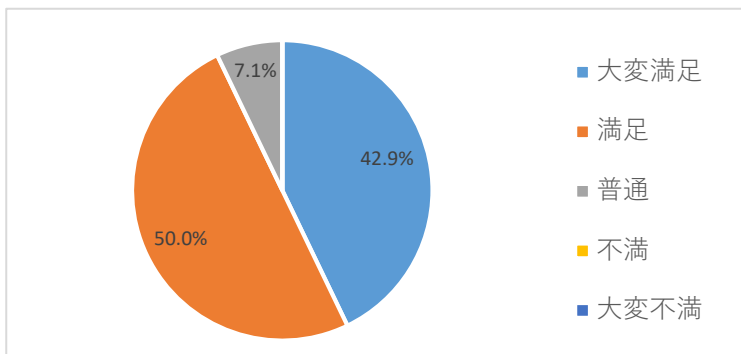
問5 8/9 [講義2] 「飯田市の公民館の特徴と役割」 飯田市公民館 三ツ井洋樹さん



- ・公民館の役割について初めてしっかり学ぶことができた。

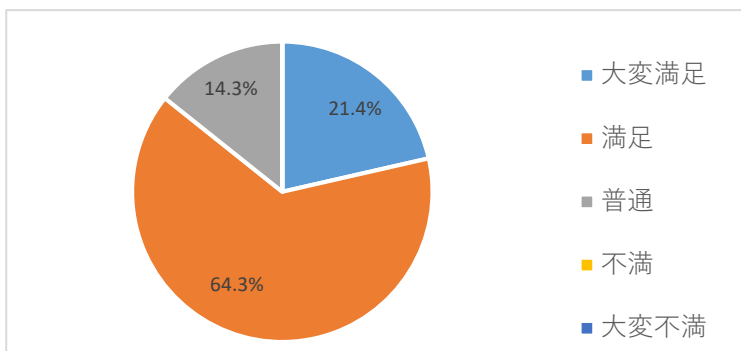
- ・ 公民館活動の特性がよく理解できる内容でした。
- ・ 公民館自体は私の出身自治体にもあるのですが、飯田市の公民館と、私がもともと知っていた公民館の違いがしっかり確認できました。
- ・ 取り組みにとっても興味が湧いた。
- ・ 飯田の特徴である公民館の働きを具体的に学べた。
- ・ 公民館活動とは何なのかについて学べた。
- ・ 公民館活動の重要さを知れた。
- ・ 内容は多少重複する所があるが、ポイントをしっかりとっていました。
- ・ 飯田市公民館の活動について、詳しく学ぶことができた。
- ・ 詳しく知ることが出来て良かった。

問6 8/9 [パネルディスカッション] 「飯田の行政職員の意識を探る」市役所職員のみなさん



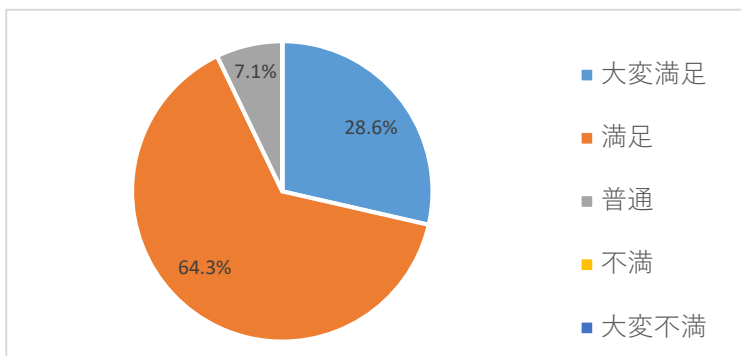
- ・ 実際に職員の方とお話しできたので公民館活動のイメージがしやすかった。
- ・ 実際の現場での体験談はとても参考になった。
- ・ 職員の皆さんの生の声を聴くことができ、具体的なイメージをもって飯田の行政を学ぶことができた。
- ・ 多くの職員の方に本音で語っていただき、どのような姿勢で公民館主事をやっているのか、イメージがしやすくなりました。
- ・ 飯田市の公民館主事経験者の方々のお話は、とても興味深く、勉強になった。
- ・ 役所の人一人一人が役割を果たしていて、住民の人との繋がりを感ずることができた。
- ・ 皆の質問に答えてくれて、とても感謝しています。
- ・ 現場の熱意、ムトスの精神を学生たちは体験できたと思います。
- ・ 主事のお仕事、公民館活動を通した市民との関わりについての講演を聴くことができた。
- ・ 飯田市にしかない取り組みを知れた。

問7 8/9 「飯田の焼肉交流会」



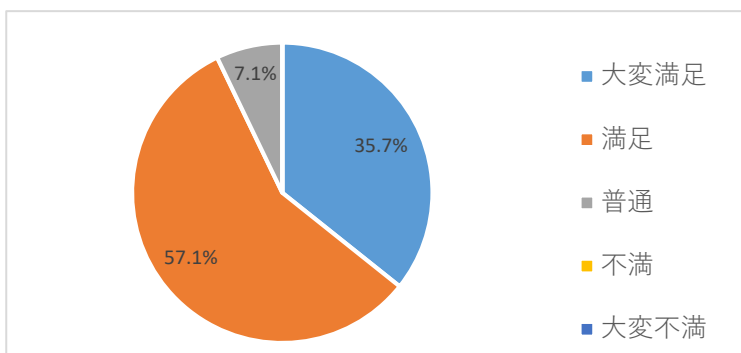
- ・焼肉が有名なまちということで、実際に食べることができ嬉しく思いました。他大学の学生との距離も縮まりました。
- ・対面交流で他大学の学生たちと意見交換ができる貴重な機会でした。
- ・焼き肉の量は少ないが、皆さんはしっかり交流を取っていました。
- ・もう少しだけ食べたかった。
- ・もっとたくさんの方と話したかった。
- ・同じ大学でかたまってしまっていたが、良い交流の機会になった。
- ・飯田市の名物である焼肉を楽しみながら、教員や市の職員の方々の貴重なお話を聞くことができた。
- ・美味しかったけど緊張してあまり食べられなかった。
- ・マトンとかセンマイより普通のお肉を増やしてほしい。
- ・少し交流時間が短かった。

問 8 8/10「りんご並木周辺の散策」大学誘致連携推進室 下平一博さん



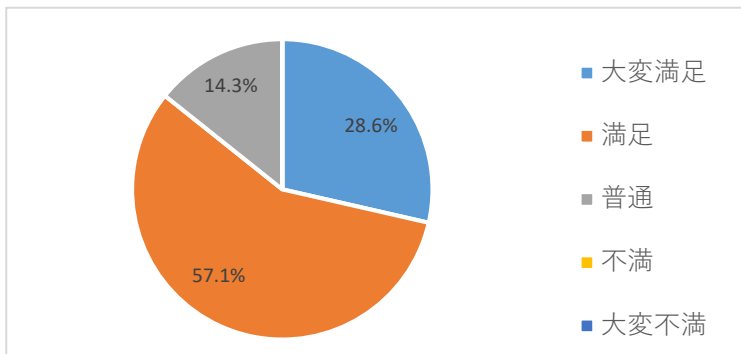
- ・実際に散策することでイメージをつかむことができた。
- ・初めてりんご並木を見ることができて思い出となった。
- ・飯田市の、中心に大事なものが詰まっている地域の形を身をもって体感でき、コンパクトシティの例として大変参考になりました。
- ・りんご並木周辺を散策しながら、りんご並木の歴史を学ぶことができた。
- ・市街地の活性化取り組みを美しい町並みから感じることができました。
- ・中学生が手入れしている様子を見れるともっと良い気がした。
- ・当時中学生たちの精神に感動されました。天皇皇后両陛下下行幸したことがわかりました。
- ・実際に街を歩きながら見る事が出来た。
- ・和菓子探訪とセットにして、徒歩圏内ではない観光地の方を別日に行けるようにするともっといいなと思った。

問 9 8/10【講義 3】「りんご並木まちづくりネットワークの取組」桑原利彦さん



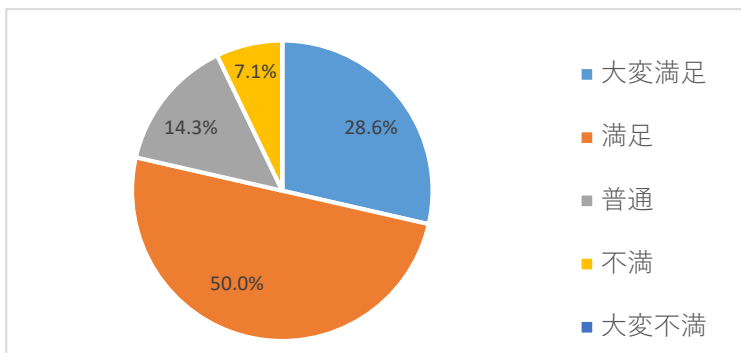
- ・意見交換の場があることの重要性を確認でき、その実際の提供の仕方を責任者の方にしていただけ、大変勉強になりました。
- ・桑原さんの個人の話と飯田市の全体的な話の両方が聞けてとても面白かった。
- ・市民の主体性が見えてよかった。
- ・住民の方が自主的に取り組んでいる姿を知ることができた。
- ・住民側からの飯田市のまちづくりについてお話を伺うことのできる貴重な機会となった。
- ・地元を愛して、全員参加型の自治を感じられる内容でした。
- ・様々な工夫を学べた。熱意を感じた。
- ・りんご並木の重要さが理解出来た。

問 10 8/10 [講義 4] 「いいだ人形劇フェスタの取組」原田雅弘さん



- ・なぜ住民にまちづくりにおける意欲があるのか、理由の一つを理解できた気がしました。
- ・市をあげての大々的な取り組みで良いと思った。
- ・住民の方の熱い思いが伝わった。
- ・いいだ人形劇フェスタは、住民主体で取り組まれており、飯田市の行政と住民の協働によるまちづくりを象徴するものだと感じた。
- ・人形劇をまちの誇りとして、若者が熱意をもってやっているという事に驚いた。
- ・文化創出する街づくり、人形劇開催がもたらす様々な成果を理解することができました。
- ・人形劇の規模の大きさを知れた。
- ・飯田市の人形劇のすごさを理解出来た。
- ・もし人形博物館に行けばよかったと思います。
- ・実際にどのようなものなのか見てみたかった。

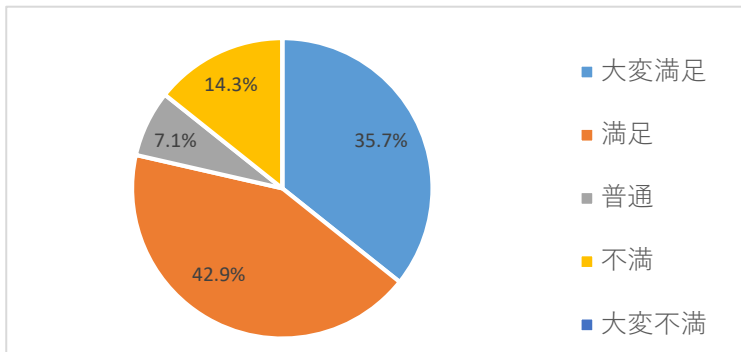
問 11 8/10 「喜久水酒造見学」NPO 国際りんご・シードル振興会 後藤高一さん



- ・テレビでよく見る酒造場の見学ができ、貴重な経験だと思いました。お酒を作る規模感など、初めて知ることができた機会でした。

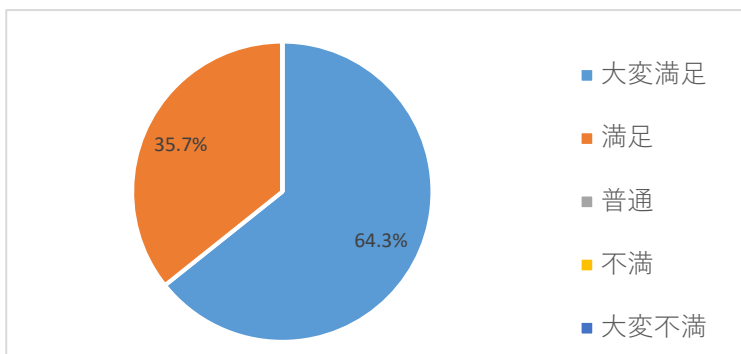
- ・貴重な場所を見学させていただき、酒造についてもっと知りたくなった。
- ・新たな特産物を生み出すプロセスがわかった。
- ・シードルの量産化を期待しています。
- ・酒造を見学することができる貴重な体験になった。
- ・地場産業育成による地域振興について考える機会になりました。
- ・お酒は無知だったので新鮮だった。
- ・製造工程を見てみたかった。
- ・お酒飲む年齢では無いのでよく分からなかった。

問 12 8/10 [講義 5] 「多様な主体の協働によるシードルの六次産業化の取組」 後藤高一さん



- ・取り組みを深く学べた。
- ・生産者の方が自身の生産物を大切にしたいは気持ちが伝わり、改めて生産者の大切さを知ることができた。
- ・地域振興のために多大な努力をしていることが感じられた。
- ・長野県におけるりんごシードルの取り組みに興味があったので、第一線の方からお話が聞け、理解が深まって良かったです。
- ・シードルを使い、まちを盛り上げようとする意欲的なお話を伺うことができた。
- ・地域の産業は一体化して、経済成長は早くなると思います。
- ・地元産品を活用した新たな産業の創出について考えることができました。
- ・お酒を飲める年齢では無いので話があまり分からなかった。

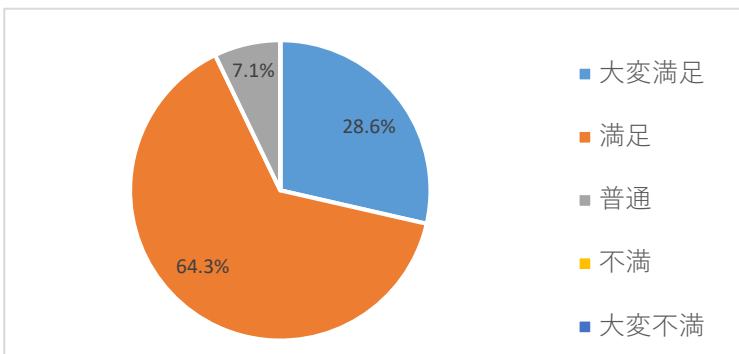
問 13 8/10 「りんご並木まちづくりネットワーク会議見学」



- ・会議の現場はとて面白い経験になった。
- ・講演で、何度も聞いていた「市民と行政の関わり」を実際に見ることができて、市民主体のまちづくりを実感した。
- ・実際に会議を見ることができてよかった。

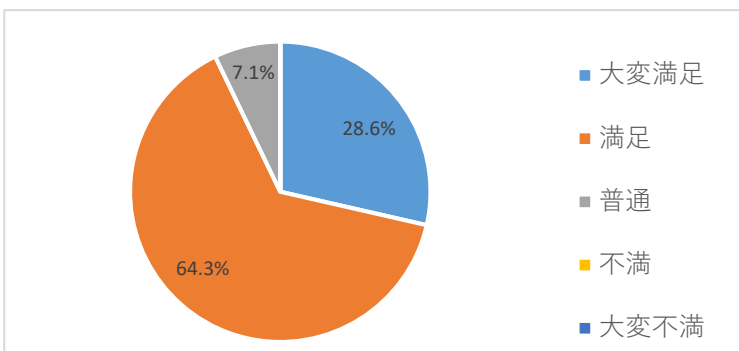
- ・住民の方が協力して、自分たちの街を作り上げていく姿を見学でき、貴重な体験となった。
- ・住民の方々が実際に会議をされている場で見学させてもらい、飯田市のすごさを実感した。
- ・住民参加のまちづくりとはこういうものか、と身をもって理解できた体験でありました。特に、高校生がしっかり会議に参加し、その意見を大人が求めている様子に感銘を受けました。
- ・住民自治の現場を生で見ることができとても有意義な時間だった。
- ・全員参加型の住民自治を肌で感じることができました。
- ・様々な職種の方々が集まり飯田のために意見を出し合う会議に参加するのはとても貴重な経験になった。
- ・参加できて、楽しかったと思います。主人公の感じがありました。
- ・実際の会議を見て、飯田市への気持ちの大きさや対等に話している姿を見てカッコいいと思った。

問 14 8/11 [講義 6] 「飯田の環境政策について」ゼロカーボンシティ推進課 小林晋さん



- ・ゼロカーボンシティを掲げている自治体は多いと認識していたが、詳しく説明を受ける機会は初めてであったので、大変勉強になりました。
- ・専門的な活動について知ることができ学習知識が増えた。
- ・脱炭素社会に向けての地域づくりのモデルであると思います。
- ・飯田市の環境政策について学ぶことができた。
- ・飯田市の環境問題への取り組みは、他の地域でも再現性があるのではないかと思った。
- ・飯田市の具体的な取り組みを知れた。
- ・設定目標が明確ですごいと思った。
- ・もう少し市民の環境意識について聞きたかった。
- ・数値で具体的な成果を知りたかった。
- ・何で川の傍の竹を削りましたか？そのままするのがきれいだと思います。

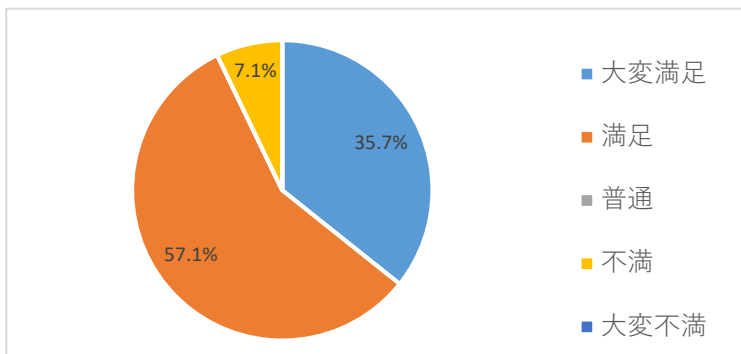
問 15 8/11 [講義 7] 「子育て支援の取組」おしゃべりサラダ 松村由美子さん



- ・興味のある話が多く素晴らしい活動に感銘を受けた。

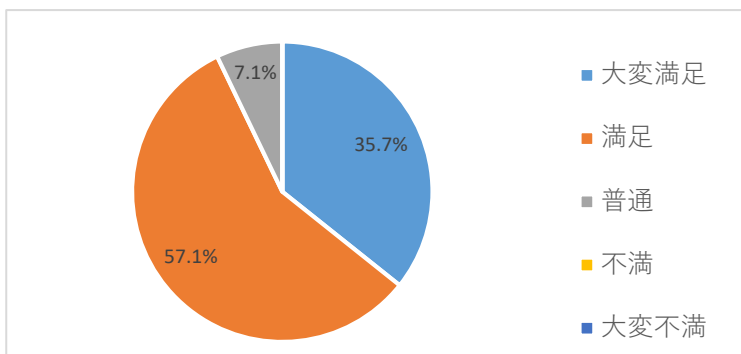
- ・子育て中の母親方の会話から事業が始まったと聞いて、現実的ではないのかもしれないと思っていましたが、今までの経緯を聞いたことで腑に落ち、成功例が理解できた経験となりました。
- ・住民側の視点で学ぶことができ、協働のイメージをつかめた。
- ・あったらいいなという気持ちや親御さん目線で企業を運営していることをしれた。
- ・子育てという住みやすさの一つの指標で活動されている方の講演を聞き、市民の活動と行政の関わりがよくわかった。
- ・子育ての集まり場所があって、人間関係がつながりやすくなると思います。
- ・少子高齢化・人口減少の日本では各地域でこのような活動が必要と改めて感じました。
- ・飯田市の子育て支援の取り組みを学ぶことができた。
- ・似たような境遇の人が集まれる場があるのはいいと思った。

問 16 8/11 [講義 8] 「本物体験！南信州観光公社の取組」南信州観光公社 高橋充さん



- ・最初から諦めないでやってみることなど、観光政策に対する姿勢が学べ、良い経験でした。
- ・実際に行われていることを知ることができ、自分の街でも参考にできないか考えることができた。
- ・飯田市とその周りの地域の取り組みについても詳しく知ることができた。
- ・グリーンツーリズムについて理解を深めることができました。
- ・スローツーリズムのお話が観光学を学ぶ人として、ためになった。
- ・観光に興味があるので、とても参考になった。
- ・飯田市の観光に対する取り組みを学ぶことができた。
- ・ちょっと内容が難しかった。

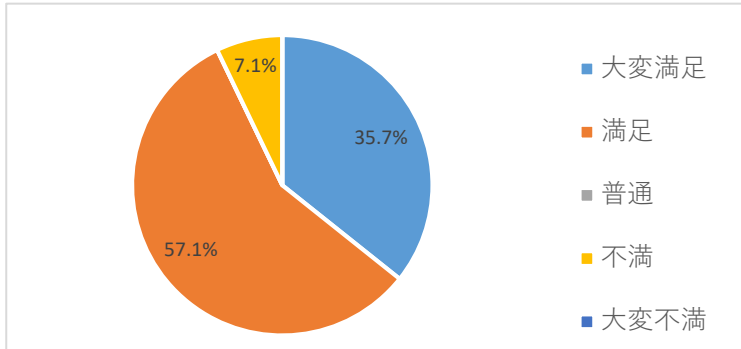
問 17 8/11 「和菓子探訪」



- ・商店街に、素敵な和菓子屋さんが多くある光景が珍しく、飯田市の特徴の一つを知れた経験になりました。
- ・伝統文化に触れることができ、飯田市民の優しさを知ることができた。
- ・飯田の食についても学ぶことができた。

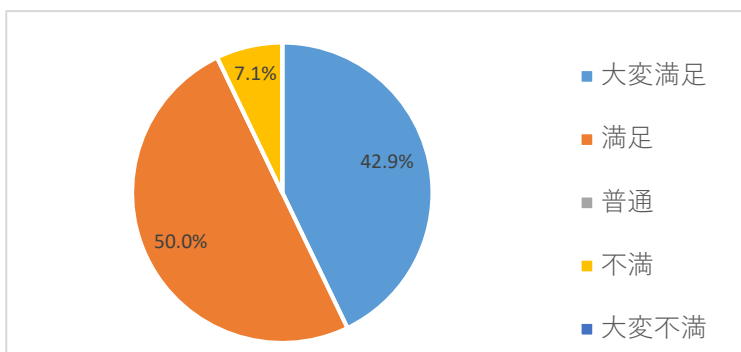
- ・地場産業を大切にしている地域振興をはかっていることが感じられました。
- ・飯田市の名物である和菓子を楽しむことができた。
- ・話を聞けたし美味しいお菓子を食べられたので満足。
- ・和菓子という少し嬉しいものを用意してあるのがとても良かったと思う。
- ・もう少し飯田の和菓子についての特徴や歴史を聞きたかった。

問 18 8/12「成果発表会」



- ・グループで考えをシェアでき、学びたいことが増えたため、今後の学習に活かしていきたい。
- ・スライド作成の時間もちょうどよく、満足の行く形で完成させることができました。
- ・ファシリテーターの大串先生のおかげで短い時間の中で良い発表ができたと思います。
- ・みんなが発言する場面があってよかった。
- ・パソコンが苦手でも上手くスライドがつけられなかったが、思いは伝わったので良かった。
- ・みなさんの成果を聞いて、勉強になりました。
- ・準備の時間が足りず満足にシェアすることができなかったが、皆がどう感じたか共有することで新たな学びを得られた。
- ・他の参加者たちの考えや感想を聞き、自分とは違う視点からもう一度飯田市の取り組みについて考えることができた。
- ・他の人の意見も聞いて良いと思った。
- ・個人でワークをして、チーム内プレゼンをするという形が中途半端だったと思う。グループを毎日変えるのではなく、初日にグループを決めるべきだと思う。毎日同じグループで振り返りを行い、最終日にグループごとにプレゼンという形の方がより深い学びになったと思う。

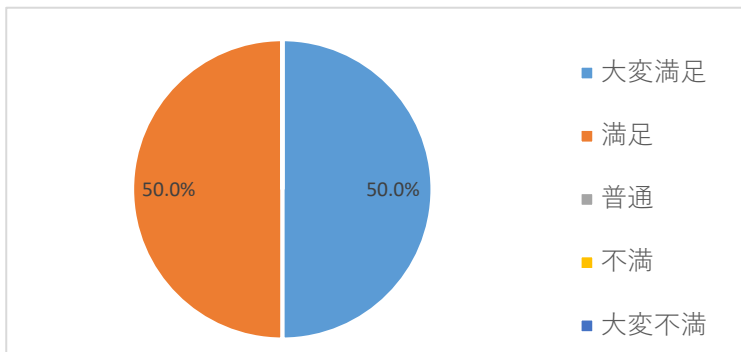
問 19 各種振り返りおよびグループワークについて



- ・効率的で良かった。
- ・自分の考えを整理することができた。
- ・他の学生と毎日一緒に振り返ったことで、自分に無い視点を毎日吸収できた濃い時間でした。

- ・他の学生と話すことで違った視点で物事を見ることが出来た。
- ・様々な角度からまちづくりについて考えることができた。
- ・積極的に取り組んでいたことが楽しかったです。
- ・他の参加者たちの考えや感想を聞き、自分とは違う視点からもう一度飯田市の取り組みについて考えることができた。
- ・他大学の学生との協働作業で学ぶことが多かったと感じます。
- ・話し合いで意見を出し合えることはいいことだと思った。
- ・グループを毎日変えるのではなく、初日にグループを決めるべきだと思う。毎日同じグループで振り返りを行い、最終日にグループごとにプレゼンという形の方がより深い学びになったと思う。

問 20 フィールドスタディ全体について



- ・とても勉強になることだらけでとても良いと思った。
- ・よく考えられた日程で、短い期間で飯田市のまちづくりについて、たくさんのことを学ぶことができた。
- ・参加する前は、ぼんやりとしていたまちづくりのイメージが正確にイメージできるようになったため、知識的にも増やすことができた上楽しく活動を終えることができた。
- ・短い滞在期間の中、工夫されたプログラムに参加できました。また、市職員の方々のサポートも助けになりました。
- ・飯田の特徴てきな行政を学ぶと同時に、他大学との交流にも繋がりとても良い経験を多く得られた。
- ・飯田市のまちづくりの軸を抜かりなく見せていただけたと思いました。自身の出身自治体よりも地域づくりの理解が深まった気がします。
- ・1つの町のまちづくりの実践例を直に見て、学ぶことができ、貴重な体験だった。
- ・緊張はしたけど、貴重な話を実体験をもとに聞くことが出来たので良かった。
- ・少し座学が多く、集中力を持続させるのが大変な部分があった。
- ・地域振興の方策について学びました。

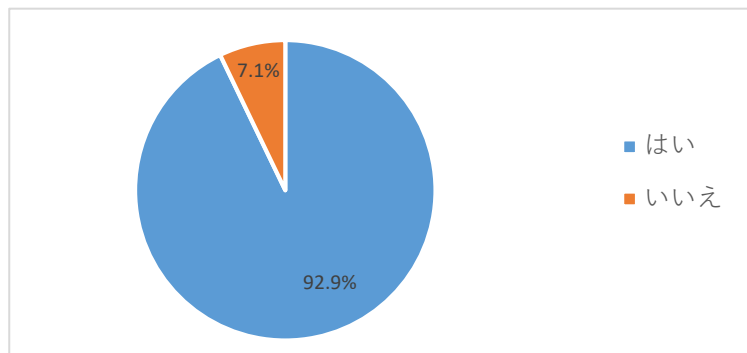
問 21 この取組をより充実したものにするためには、どうしたらよいと思いますか？

- ・りんご並木周辺の散策と、少し遠出の散策の二つがあると、新鮮味がもっと増すと思います。
- ・限られた時間の中でのプログラムですが、1泊増やしても農家泊などの体験があれば良いかと思いません。
- ・同じ大学で固まりすぎないようにできたらより良いと思った。現地実習として座学だけでなくもう少し体験学習を取り入れられると良いと感じた。
- ・様々な方のお話が聞け、大変勉強になりました。自由時間に商店街に行く機会がありましたが、商店街の廃れが問題となっている地域が多いのにも関わらず、飯田市では商店街にいる人が多く、魅力的

なお店も沢山あり、商店街の活用がとても上手だと思いました。商店街があればほど活発な地域は県内にもあまりない感覚があるので、商店街の活用に関しても、何が特徴があればお話を伺いたかったと思いました。

- ・グループワークだけでなくオリエンテーションでの交流をもっと増やして欲しい。
- ・行政職員の方や、取り組みをしている市民の方の話を聞くだけでなく、直接市民の方にお話しを伺う機会があればいいなと感じた。

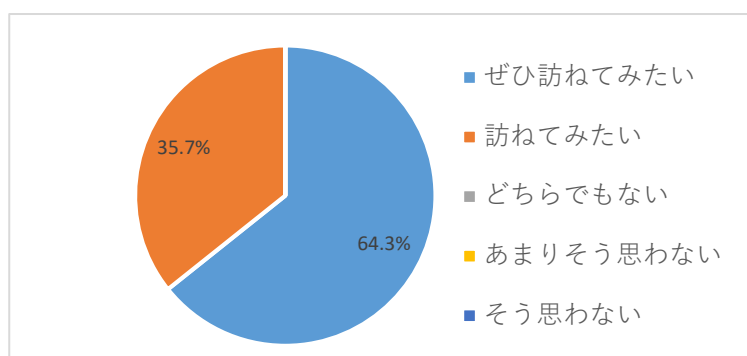
問 22 このような取組があれば、また参加したいと思いますか？



【はい】

- ・充実した4日間を過ごすことができました。たくさんの学びがあり、まちづくりや地域づくりに興味や関心がある友人に、おすすめできるフィールドスタディでした。お世話になりました。
- ・参加してまちづくりに対する意識が明確に変わり、深く学ぶことができた。
- ・観光で飯田市を訪れたことはありますが、観光に一度来ただけでは、地域の特色や政策の方向性などは全くわかっておらず、このような行事に参加したからこそわかることが沢山あるのだとわかりました。地域づくりを様々な視点から学ぶことができるので、今後このようなことがあればまた参加したいと思います。

問 23 また飯田を訪ねてみたいと思いましたか？



- ・まだまだ知らないところがあるのでまだ探りたいです。
- ・人形劇フェスタを見てみたい。
- ・天竜峡に行ったことがありますが、次回訪れる際は、今回学んだ公民館や人形劇フェスタを見に行きたいです。特に、しっかり常時機能している公民館は、私にとって珍しいものであるなので、現物を見に行きたくくなりました。
- ・秋の飯田の町を楽しみたいと思います。金木犀の匂いや銀杏の金色の葉を楽しみにしたいと思います。

令和5年度 南信州・飯田フィールドスタディ レポート 目次

氏名	大学	学部	ページ
1 高柳 壱	長野県立大学	グローバルマネジメント学部	16
2 手塚 英里	長野県立大学	グローバルマネジメント学部	18
3 二木 鈴花	長野県立大学	グローバルマネジメント学部	19
4 加藤 旺樹	摂南大学	現代社会学部	20
5 宮崎 希実	摂南大学	現代社会学部	21
6 宮本 まなか	摂南大学	現代社会学部	22
7 今津 百伽	摂南大学	現代社会学部	24
8 山本 彩夢	摂南大学	現代社会学部	25
9 小溝 柊汰	立命館アジア太平洋大学	サステナビリティ観光学部	26
10 高橋 脩	立命館アジア太平洋大学	サステナビリティ観光学部	29
11 野村 航平	立命館アジア太平洋大学	サステナビリティ観光学部	33
12 山本 琉慎	立命館アジア太平洋大学	サステナビリティ観光学部	35
13 吉岡 輝	立命館アジア太平洋大学	サステナビリティ観光学部	36
14 金 叡花	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	37
15 倉地 亜子	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	38
16 鳥居 なの葉	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	40
17 横田 理紗子	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	42
18 大川 侑菜	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部	44
19 西村 仁	立命館アジア太平洋大学	国際経営学部	46

南信州・飯田フィールドスタディに参加することで、飯田の地域づくりの様々な特徴を学ぶことができた。

飯田は計 20 の市町村が合併してできた市である。私はそれを知った時、市町村合併によるデメリットである、地域間格差や歴史・伝統・文化の喪失、市民と行政の連携の複雑化など、様々な問題が生じるのではないかと考えた。しかし飯田は集権から分権への移行を考え、新たな地域自治組織制度を導入することでそれらの問題を解決したのだと私は理解した。そして、この制度の導入が飯田の行政の特徴である「協働」によるまちづくりを成り立たせているのだ。

地域自治組織として住民が地域での自治活動を円滑に行うために重要となる行政機構が、旧村単位の 20 地区すべてに設置されている自治振興センターと地区公民館である。公民館の設置によって、合併された 20 地区は合併後もコミュニティが保たれ、市は全地区に密着した行政サービスの提供や住民の自治活動の支援を行うことができ、飯田は全体として自立的・発展的・持続的な強固な市となる。

公民館について学ぶ中で、私は住民の公民館事業に対する積極性にとっても驚いた。私の地元は沖縄県の宮古島市というとても小さな市でありながらも、公民館事業に対する住民の積極性はあまり高いとは言えない。私自身、幼少期から高校卒業まで公民館で行われる事業に一つも参加した記憶はなく、そもそもこれまでどのような事業が行われてきたかすらも知ることはなかった。一方で飯田市は、宮古島市に比べて人口も面積もはるかに上回る規模であるのにもかかわらず、公民館活動が住民の生活を豊かにし、地域づくりを活性化させ、地域づくりの主体者としての住民の意識を高めており、公民館の目的(社会教育法第 20 条)を果たし、公民館としての役割・機能を十二分に全うしている。その背景には、飯田市独自の制度である住民主体の公民館活動を推進するための専門委員会の設置が大きく関係していると考えられる。市内 20 地区でおよそ 900 人の専門委員が活躍しており、企画・文化・体育・広報・育成といった公民館活動の活性化に必要な分野の委員会が設けられ、またそれらを統括する公民館長は地区住民から選出される。行政職員は公民館主事として住民が自ら行う様々な事業の企画立案・実施をサポートする。このような大部分を住民が担う専門委員会の在り方が公民館事業への住民参加が活発になる理由であると考えられる。

公民館主事(OB/OG 含む)との意見交換の際にはとても貴重なお話を伺うことができ、多くの学びを得ることができた。印象に残った話も様々で、委員会の委員に公民館主事をやってみたいとお願いされたことや、運動会の運営を公民館主事(行政職員)としてすべて担おうとした際に委員会に強く怒られたことを聞いた時、住民の公民館活動への強い気持ち、積極性を知ることができた。また、ある障害児に合わせて同学年全員が行事を取り消すか合わせずに実行するかで市民とぶつかった話や、市民が行政との距離感に違和感を感じ自分らに合わせて欲しいと言われた話から、地域の間人関係の重要性とそこに関わる行政の在り方やそれに対する市民の望みを学ぶことができた。公民館主事を実際に経験した職員の方々の生の話は、公民館事業の在り様と市民・行政の協働の形を具体的にイメージすることができ、飯田市の地域づくりの特徴を深く学ぶことに繋がった。また、意見交換で話を聞き、一般的に行政は市民に対して間接的に関与するものだが、公民館事業では行政が市民に対して直接的に関与していることに気づくことができた。

また、地域づくりに住民が積極的な理由として、「ムトスの精神」と「結の心」が深く関係していることも分かった。地域に対して自ら何かしようとする自治の精神や互いに支え合い、共に取り組む協働の仕組みを重んずる二つの考え方が、住民が主体的に地位に関わろうとする土壌を形成していることを学んだ。

他にも、フィールドスタディでは飯田市が取り組む多種多様な政策を知ることができ、飯田市の将来性に多くの学びを得ることができた。飯田フィールドスタディで私が一番強く感じたことは街づくりにおいて最も重要なのが市民と行政の深い関係性であるということである。

飯田フィールドスタディを通して、当市では、住民と行政の協働でまちづくりを行うシステムが構築できていることを知った。ここでは、当市の成功を生んだ歴史的背景、そして、他の自治体がまちづくりを成功させるために参考にできる行政、団体、住民の取組みをまとめることで、飯田市のまちづくりの特長を再確認する。

まず、飯田市の背景について、確認していく。当市の歴史的な特徴には、公民館が地区ごとに残っていることや、人形の町としての誇りの意識が定着していることがまちづくりに大きく影響している。公民館については、数にすれば日本の市町村で全国トップであり、そのそれぞれにおいて、公民館主事の行政職員が住民の役員とともに毎日業務を行っていることも他にはない特徴である。このように、公民館が、常時住民のそばで機能していることによって、住民の相談窓口の確保ができる点や、集会の開きやすさの点で、住民がまちづくりに気軽に参加しやすい環境が作り上げられている。人形については、人形作りが盛んであった当市において、その伝統を守るべく以前より人形劇フェスタを地区ごとに主催しており、現在では世界レベルの行事としての誇りを持ちながら住民が参画できるまちづくりの一大行事ともなっている。以上のように、当市には、住民が積極的にまちづくりに参画できる仕組みが歴史的に整っており、自分たちのことは自分たちで行うという意識も醸成されてきたことが分かる。

次に、歴史的な背景とは離れ、行政活動や、住民の行動の例を見ていくことで、他の自治体で住民と行政の協働システムを構築する際に大事にするべき要素を3つ挙げる。歴史的な背景により、住民がまちづくりに参画する姿勢が醸成されていることに加え、当市は、さらに住民の参画を図るべく取組みを行っているのだ。

その一例として、住民を巻き込んだ竹灯籠づくりイベント、ガードレールの清掃作業、いかだ作り等が挙げられる。これらの取組みは、当市の景勝地の一つである鷲流峡での不法投棄や、放置竹林により景観が損なわれているとの行政と観光事業者の共通の問題を解決するべく、両者が連携して行った天竜川鷲流峡復活プロジェクトで行われたものである。地域にある環境課題において、協力事業者と連携し、さらに、イベント化することで住民を積極的に巻き込みながら解決を図ることができている点が大変評価できる。

それ以外の観光分野においても、南信州観光公社が行う、農家の方の家を宿泊先とする農家民泊の事業も特徴的である。他の市町村と同じように農業における高齢化が進んでおり、農家の方に新しい事をお願いすることを本来なら躊躇ってしまいがちである。だが、飯田市では、導入実験をしたことで、高齢の農家の方でも積極的に行動してくれる様子を確認でき、本格実施に至ることができた。時に、外国籍の生徒、学生を受け入れた際にも、農家の方が進んで翻訳アプリ等を使い、コミュニケーションを取る姿勢を示してくれたという。初めから諦めるのではなく、住民の可能性を捨てず、できることから住民に取り組んでもらうという姿勢も、住民参加によるまちづくりにおいて重要であるようだ。

最後に、住民の積極的な考えを実行してもらうために、場所の提供を行うことも行政の役割である。当市では、空いているスペースの使用団体を公募し、子育て中の母親による自分たちが集える場所を作ろうという活動に場所を提供した。このように、住民が、自分たちの裁量で企画、運営が行える場所を用意し、提供することでも、積極的な住民のまちづくりへの参画を手助けできる。

以上で見てきたように、飯田市では、行政と住民のまちづくりにおける積極的な連携ができており、その要因として、地域が大事に受け継いできた伝統を皆で守ろうという姿勢と、適切な行政や企業の働きかけが存在していることがわかった。行政と住民の協働が達成できるまちづくりのヒントが、飯田市に存在していた。

1. フィールドスタディで学んだこと・感じたこと

8/9~8/12の4日間、飯田むとすプラザを拠点に約30名の大学生と、飯田市のまちづくりについて学びディスカッションを通して学びを深めた。

りんごまちづくりネットワークによるリンゴ並木や公民館活動、人形劇フェスタ、シードルの六次産業化、市民ネットワーク会議等、様々な飯田市の取り組みについて学んできた。その中で共通して言えることは、市民一人一人が問題意識を持っており、「無トスの精神」が土台となる市民としての責任が強いことである。他市町村と比較してみても、市民ネットワーク会議等のように市民と行政が気軽に話すことができる仕掛けづくりが行われている自治体は他にないように感じる。

また子どもたちが地域に入る入口が数多くあり、自分の町をしるきっかけづくりになっていると考えられる。さらには人形劇フェスタを通じて、自分自身が地域に貢献できているという意識づけが出来、世代を超えて文化の継承が上手く図れていると考えられる。このような取り組みを通じて、飯田市の子ども達は、幼少期から地元愛が育まれ、この地元愛こそUターンの多さに直結しているのではないかと考えられる。

だが、全国的にUターンの多さだけでは賄え切れないほど人口流出が進んでいる中、関係人口を増やす取り組みが今後の課題となってくるのではないかと感じる。農家民泊という外部の人々と繋がる土台ができているため、農家民泊と他の事業を組み合わせ、移住体験を実施するなど複合的な視点が重要になってくると考えられる。

また公民館活動において10代~20代の若者の参加率や女性の割合が疑問点として残った。加えて、おしゃべりサラダのスタッフの男性の割合も少ないのではないかと感じた。男性スタッフがいることで、シングルファザーの心の支えや、男性の育児に対する悩みや不安も軽減されるのではないかと考えた。このような点は、今後さらに学びを深めていきたい点であると共に、飯田市さらには多くの自治体の課題にもなりうる部分なのではないか。

2. 全体を通しての感想・今後に向けて

全体を通して、飯田市は市民と行政が協働できる法制度がしっかりと整っていることや「ムトスの精神」を始めとする住民自治の基盤の考え方が浸透している。さらには地区住民自ら地域をデザインする地区構想が地域と行政の信頼関係に繋がっているのではないかと考えられる。これらを土台とすることで飯田市のまちづくりが成り立っているのではないかと考えた。

では、飯田市のような基盤がない地域では如何に濃い住民自治を行っていけるかが課題となる。今回のフィールドワークで学んだ飯田市のまちづくりは、上述した土台がしっかりと形成されている点や、飯田市の規模感、地形、気候、飯田の市民性なども関連してくるのではないかと感じる。よって、飯田市のまちづくりを他自治体へ完全に模倣するのではなく、飯田市の特性を総合的に分析したうえで、他自治体へ派生させていくことが重要である。

今回の飯田フィールドスタディを通して学んだことを、他自治体で如何に生かせるか考えていきたい。

また各事業者・市民・行政が「自分が楽しむこと」の延長線上に上述した取り組みが存在していることが印象的であった。自分たちがやりたいと思ったことを互いに認め合い話し合える居場所があることが飯田市の特色である。他自治体へ展開していくためには、行政・住民・事業者の協働システムが何故重要なのか認知することが大切なのではないか。その上で、一人一人の思いを形に出来る仕組みづくりをしていくことが重要であると考えられる。

私は今回の長野県飯田市での4日間のフィールドスタディの活動で、飯田市が行っているまちづくりについて様々なことを学べた。

まずは1日目。最初このフィールドスタディの参加者が集まった時、大学や年齢も違う人たちばかりでコミュニケーションを取ることに不安を感じていた。だがアイスブレイクを行い他県や他大学のことも知れたことで、フィールドスタディでも新しいことを知れると思うと、感情が不安から一転し楽しみが変わった。まずは、「飯田市のまちづくりの特徴と仕組み」の講義を受けた。本講義では、飯田市の歴史、地域自治組織に関する制度の概要と仕組み、住民と行政の協働によるまちづくりなどのトピックがあった。本講義から学んだことは、地域自治と団体の充実性だ。飯田市内の各地区の差はあまりなく、飯田市の全域に団体を設定し、市民の意見が正当に反映されるようになっている。また、住民主体・行政協働によるまちづくりによって住民側は委員会を組織して活動し、行政側は勝手に政策を実施せず住民の活動の支援や推進を行い、市と市民が対等な関係になっていると感じた。

次に、「飯田市の公民館活動の特徴と役割」の講義を受けた。本講義から学んだことは、公民館活動が地域自治の下地となっていることだ。公民館活動では地域の人と活動を学ぶ場であり、住民自治の力を培っている。さらに、ムトスの精神や結の力などの合言葉で、住民がまちづくりに対する意識を高くしていると思う。

次に2日目。まずはリンゴ並木周辺を視察した。リンゴ並木は災害復興の象徴であり、今も中学生の生徒が管理している。その後を受けた講義では、飯田市の文化面の話を聞いた。飯田市では人形劇がとても有名で、毎年たくさんの人がこのイベントに参加する。人形劇に出る人とイベントスタッフの人が協力して運営するので、ここでも人とのつながりがある。次に視察した酒造では、飯田市のシンボルであるリンゴ並木の影響から、りんごのシードルを生産していた。次に、市役所で行われる会議に参加した。会議には色々な団体の方々が集まり、イベントのことで会議をした。中には高校生の方もいて、大人だけでなく学生も主体的に参加することに、とても感心した。

次に3日目。まず「飯田の環境政策の取り組み」の講義を受けた。本講義では、飯田市が独自で行っている環境政策の説明で、特に飯田市内で完結できる地域マイクログリッドにはとても驚いた。現在、世界共通でSDGsと呼ばれる環境政策が日本でも取り組みが進んでいる。だが、飯田市はいい環境プランという名前でSDGsのような目標を立て、具体的に取り組みやゴールがあるので、明確になっていて良いと思った。次に飯田市の観光政策の講義を受けた。体験型の観光によって、観光スポットに行くということではなく、その地域の歴史や生活方式を実体験してもらうことによって、地域の魅力を伝えられることにとても感動した。また参加者の方に学びや発見が生まれ、地域政策の重要な人材にもなり得る。次に飯田市街の散策をした。ここでは飯田市の歴史や和菓子を堪能した。

私がこの4日間のフィールドスタディの活動で、以前では曖昧だったまちづくりで行っていることについていろいろ学べてとても良かった。住民と行政の親密性からこのような地域において効果的なまちづくりができると思うので、他県でも市民と行政の対等で良好な関係を築き、飯田市のようないい地域にするサイクルが大事だと思う。また、飯田市の方のお話と一緒にフィールドスタディに参加した人の意見から、自分では思いつかなかった考え方やアイデアが聞けて、色々な発見ができてよかった。

《1日目》

他大学の人と実際に会って交流するのは初めてであったためオリエンテーションをした。2、3人に自分の名前、最近の嬉しかったことなどを互いに話し合った。その後、飯田のまちづくりの特徴と仕組みを前澤さん、飯田市の公民館の特徴と役割を三ツ井さん、飯田の行政職員の意識についてを大阪観光大学の小畑先生、追手門学院大学の大串先生、飯田市議員の方々にお話を聞かしていただいた。全てお話を聞かせて頂いたあとグループワークをした。1日目は同じ学校の子達とグループを組み1日で学んだことをお互いに共有し、またこの大学の人と交流したなどを話し合った。この日の夜ご飯は参加者全員で飯田市の焼肉を食べた。初めて見て、食べるマトンやセンマイを食べた。不思議な味がした。

《2日目》

1日目と同様にオリエンテーションから始まった。それからりんご並木周辺の散策に行った際、午前9時になると時計塔から人形が出てくるのを見ることができた。その後りんご並木まちづくりネットワークの取組を桑原さん、いいだ人形劇フェスタの取組を原田さんから聞かせて頂き、その後タクシーで移動、喜久水酒造の酒蔵の見学をした。飯田市ではシードルを盛んとしたお酒がありシードルを発展することによって地域活性化につながり、有名であるりんごをより多く使えることに工夫している。夜は公民館に集まり、飯田市地域の会議に参加した。そこでは年齢層はバラバラで驚いたことに自分たちより年下の高校生の女の子も参加していた。また自分の発言をより伝えるためにその子は資料を自分で作り、より説得力のある意見を言っていた。また周りも子供だからと感じるのではなく1参加者としてその子に向き合い意見を聞いていたところが他の地域とは少し違うなど感じた。

《3日目》

オリエンテーションを行った。その後、飯田の環境政策についてを小林さん、子育て支援の取組、おしゃべりサラダの活動を松村さん、南信州観光公社の取組をガイドの方にお話を聞かせてもらった。その中で興味深い、また疑問に思ったことが子育てサロンを作ることによっていつでも通いやすく、親子の居場所ができる、他人との交流をすることで孤立化を防ぐことができる面では良いが逆に交流ができるからこそイザコザやトラブルが多くなる可能性もある。そうなった時の対処法やそうならないために未然に防ぐことも視野に入っているのかである。

《4日目》

各自この3日間で学んだことをまとめて発表に向けて一枚のパワーポイントにまとめ、グループごとに発表した。その際に自分とはまた違う着眼点を持つ人や、同じ考えを持つ人と出会い、学ぶことの多かった3泊4日であったと感じ、また参加してよかったと思える合宿であった。

私は、四日間を長野県飯田市で過ごしてとても良い経験ができたと思いました。今まで長野県のイメージは果物やオリンピックというイメージしかなくてその中で、飯田市という街を知り初めて聞いた名前であり初めて行く場所でありとても想像がつかなかったけど今回の活動で地域の人と関われるということは私にとってとても大事な機会だと思いました。コロナだったら絶対行けてないし、私の学部は現代社会学部で人と話すことが主に多い学部なのでその中でいろんなことを知れるということはとても濃いフィールドスタディにすることができました。

1日目では、「飯田市の街づくりの特徴と仕組み」飯田市の公民館の特徴と役割についてお話を聞いて基本理念である、地域づくりに関わる多様な主体がその責任や能力などに応じて役割を分担して行政も含めお互いに協力しながら地域づくりを進めていく上で「ムトスの精神」…「ら…しようとする」の合言葉や「結の心」…お互い支え合ってやる時は一緒に取り組むということの基本としたまちづくりの動きや行政の人だけでなく住民も率先して地域づくりに参加してる動きがちゃんと明確で伝わりました。人口が多くない中で工夫があったり教育や文化などいろんな事業を行う上で飯田市特徴の地域づくりを知ることができました。公民館が生活そのものという言葉はとても印象的でした。夜には名物である焼肉の時に初めてセンマイを食べたけど美味しかったです。

2日目では、りんご並木を散歩したり、「飯田人形劇フェスタの取組」や喜久水酒造の見学やシールドについて学んだりして特に飯田市市民の行動がわかる1日でした。

りんご並木の散歩の時にたくさんのりんごがありとても綺麗で美味しそうでした。それでも市民は獲ったりしないと聞いてとても驚きました。いい大人形フェスタの取組では、3世代が分かち合う感動を大事にしてたり45年という歴史を今でも繋げていこうとする動きや「みんなで作るみんなのまつり」という言葉がとても印象的でした。

小さい頃にボランティアできてた子達が大人になってまた遊びに来るという話を聞いた時には本当に感動しました。

酒蔵見学では普段では滅多に体験できないことでとても魅力的な場所であり未成年だけど大人になったら嬉久酒造のお酒を飲んでみたいと思いました。代々受け継がれていくのを実感した日になりました。

3日目では、「飯田市の環境政策について」や「子育て支援の取組、おしゃべりサラダの活動」や和菓子訪問などいろんな地域を散策した一日でした。

環境政策では、然を大事にした上で子供たちも積極的に参加しててすごいと思ったり、環境モデル都市の選定に対しての動きが大気環境の維持やポイ捨て防止の推進や省エネルギーの加速的推進など多くの取り組みをしていてとても感動しました。「不法投棄」「放置竹林」の課題の中で連帯、協働して取り組む！という意識をするから然も同じように大事に守られていると思いました。それを大人だけでなく幼少期から取り組ませるといことが人口が少ない上で継続できる秘訣だといことがわかりました。

子育て支援では、妊婦さん講座やおしゃべりサラダなど様々な工夫があり、誰もが来やすい場所で必要な情報も集まり、発信できるという環境は、女性にとっても男性にとっても大事な空間であり、子育てだけでなく分身の気持ちを聞いてもらえるという安心がある場所は大事だと思いました。これからの取組についても私たちも一緒に考えることができよかったです。和菓子訪問では、初めてきんづばを食べました。初めての味でしたがとても美味しかったです。

4日目では、最終日ですがこの3日間の振り返りを発表しましたがみんな色んなところに着目してとて

も濃い時間を過ごすことができました。

全体を通して、人と関わることの大切さを改めて学ぶことができました。最初は同じ大学の人だけでいましたが最後には、他の大学の人と仲良くできたりして今回のフィールドスタディがなかったらこんな濃い時間も過ごせなかったし色々な人にも出会えてないしとてもいい経験になりました。それを生かして今後も様々な地域について知りたいと思いました。

飯田市でのフィールドワークを他大学の学生と協力しながら学び、多角的な視点から飯田市の取り組みや事例と自身の地域の課題を見つけることができた。それぞれのまちづくりの取り組みを聞いていく中で、飯田市は他の地域と比べ、「市民同士の交流が多い」ことや「文化を大切にしていること」、「行政に頼らず、自分たちで町を盛り上げていく工夫」などといった地域を大切に考え、その地域を自分たちの力で動かしていることが分かった。特に、公民館を市民中心で回しているという点においては他の地域にはほとんどなく飯田市の大きな特徴の一つである。公民館の運営を行政に頼らず市民が中心となっていくため、「あったらいいな」という市民の身近な悩みに寄り添いやすい。それによって事業が新しくでき、交流が増えていくことによって町全体が一つになりやすい。

今回のフィールドワークで実際に公民館に集まり、話し合いの機会に参加させてもらった際に、年齢や職業関係なく対等な関係で意見を出し合い、より住みやすいまちづくりを行っていく様子が見られた。話し合いに参加した証拠として「一人一回は発言する」というルールがあるのも、年上の人に遠慮せずに意見を出し合えるようにする工夫がされていて、一人一人が尊重されているのだと感じた。普段関わることのない年代の人と集まり話し合うことで、物事を違って視点から見ることができ、飯田市にしかできない地域活動へとつながるのだと分かった。文化に対しても、飯田市は変化を恐れずに楽しみながら昔ながらの文化を生かしたまちづくりを行っている。和菓子を取り扱っている店舗が多いことや多くの世代に愛されている人形劇、たくさんの人の思いが詰まったリンゴ並木などが主な例である。文化をいい意味で変えずにそのままをずっと受け継がれているので、世代を問わず、愛され続けていることが分かった。

また、環境に対する意識も高い。飯田市は環境文化都市宣言をし、市民参加の低炭素のまちづくりを行っている。みんなで目指す「六つのゴール」を子供から大人までの幅広い世代で行っていたり、再生可能エネルギーへの補助金を出すなど環境に対する問題を他人任せにするのではなく、一人一人が責任を持って主体的に取り組める工夫がされている。低炭素でも快適に暮らすことができるエコハウスもある。エコハウスの中には、解説者がおし解説を聞くだけでなく、エコに暮らせるための相談や体験ができるようになっている。このようなエコに対する取り組みを行うようになったのは、カリスマリーダーや、うごくる～むの存在が大きい。行政だけではなく、やはり一人一人の取り組みへの意識が十分に高いのも他の地域よりも優れていると感じた。そして、リンゴや竹を利用し、違う形で新しいものを作っているのもエコへつながっていることが分かった。

一方、私の住んでいる地域では、市民同士の交流が少なく、地域のイベントが行われていても参加する人は違う町からやってきた観光客や子連れの女性などが多くイベントへ参加する人や世代が限られている。飯田市のように、世代関係なく多くの人に参加してもらうには、やはり市民同士の交流の多さや地域への関心度が課題になると今回のフィールドワークを通じて改めて理解することができた。

観光面に関して、通過型から滞在型の観光へ変え、観光客に対して特別な対応を取らないようにしているのも魅力の一つだと考えた。普段通りに対応することで心が近くなり、より観光を心から楽しめ、環境について考えられる貴重なものになるのだろう。

今回の貴重な経験を自分の住んでいる町だけでなく、他の過疎や人口減少などで困っている地域に生かしたいと思った。

一日目

飯田のまちづくりの仕組み 市民の共同の理解の講義を受けて、飯田市はもともと複数の町や村が合併されてできた市であることや、飯田市の人口が平成 17 年の 108624 人をピークに徐々に減少していることを知った。そして、平成 16 年すべての分野で制度の見直しが必要とされ、多様な市民ニーズに対してどのように予算などを使用するかなど市民の意見を取り入れ一人一人が地域社会にできることをする新たな地域自治組織制度の導入されたことを学んだ。地域内移住の住民すべてで構成する「地域自治区」や、行政による縦割組織を住民による横断組織に再編し住民自治を基軸とした地域づくり活動を行う「まちづくり委員会」など人口が少ないことを生かしていることが大きな特徴だと考えた。また、飯田市の住民と行政の協働によるまちづくりの特徴として①旧村単位の 20 地区の自治振興機能を重視した行政機構②市民と「協働」できる力量を備えた職員の育成が挙げられていた。その中で特に印象に残ったのは、①の行政機構の一つである飯田市の公民館活動についてだ。わたしのまちにある公民館は、高齢者向けイベントや小中学生対象の習い事が実施することでしか使用しないため利用する年代が限られている。そのため、自分が知っている公民館と飯田市の公民館のギャップに驚いた。飯田市の公民館は市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行いもって住民の教養の向上、健康の増進、情操の鈍化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的としており、地域全体で公民館を利用し、より良い地域社会を作ろうという意識づくりをしやすい環境が整えられていることが分かった。

二日目

市民が主役の活動「りんご並木まちづくりネットワークの取り組み」の講義を聞いて、特に重要だと感じた点が 2 点あった。1 つ目は、「他人」のためにまちづくりをするのではなく「自分」のためにまちづくりに取り組むということだ。2 つ目は、「結果」を求めない、楽しいことをするという精神でまちづくりに取り組むことで「失敗」という概念をなくすことだ。次に「いいだ人形劇フェスタの取り組み」を聞いて重要だと思った点は、一人ひとりがシビックプライドを持つことだ。シビックプライドを持つことが、飯田市を離れた人が U ターンする 1 つの要因だと感じた。また「多様な主体の協働によるシールドの六次産業化の取り組み」では、ビジネスフレームワーク＋クリエイティブなアイデアで飯田氏の特産品であるりんごを生かして地元を PR する姿勢を学んだ。

三日目

「飯田の環境政策について」では、クリーンエネルギー普及に向け、地域住民、企業との連携によりやりがいの醸製、住みやすいまちづくりが可能になることを学んだ。「子育て支援の取り組み、おしゃべりサラダの活動」では、「変化することを恐れない」という精神を持つこと、活動を持続するために「自らが楽しむこと」が重要だと学ぶことができた。「本物体験！南信州観光公社の取り組み」では、田舎のコミュニティは外部の人を受け入れるのに抵抗があるイメージだが、インバウンド団体を快く受け入れる寛容さとチャレンジ精神にギャップを感じた。

三日間の学びを通して

各分野が横断的に協力していること、「自分が楽しむこと」「失敗を気にしない」「変化を恐れない」精神を共通して大事にしていること、そしてその精神が、地域全体の行動を起こしやすい環境をつくっていることを学ぶことができた。

1. はじめに

人口減少や少子高齢化が問題となる中、持続可能なまちづくりが求められている。過疎問題懇談会（2020）は、人口減少社会の到来によって、過疎地域、都市ともに、持続可能性の向上が課題となるため、新たな過疎対策では、人口減少が著しい過疎地域で低密度化が進行する中であって、いかに持続可能な地域社会を形成していくかが重要であるとしている。長野県飯田市（以下、飯田市）では、環境文化都市を目指し、市民と行政の協働によるまちづくりが行われている。2023 年 南信州・飯田フィールドスタディ（以下、フィールドスタディ）を通して、飯田市の市民と行政の協働によるまちづくりを学んだ。飯田市の市民と行政の協働によるまちづくりは、どのように行われているのだろうか。飯田市の市民と行政の協働によるまちづくりには、自立性の高い公民館活動や、特殊な役職の公民館主事と、飯田市の市民と職員の地域への強い思いが大きく影響を与えている。本稿では、フィールドスタディを通して学んだ、市民と行政の協働による活動として、公民館活動を取り上げ、飯田市のまちづくりを読み解く。

2. 飯田市の公民館活動

飯田市は長野県南部に位置する人口約 10 万人の地方都市である。公民館活動を中心に、先進的なまちづくりが行われており、全国から注目を集めている。荻野・八木（2021, p.194）によれば、飯田市のまちづくりのなかでは、「まちづくりの主体は住民であり、行政はそれをする（黒子に徹する）」という、この地域に根付いてきた住民自治と団体自治の姿を見出すことができるという。飯田市は、現在に至るまで合併を繰り返してきた。旧村単位で 20 地区から構成されており、2007 年から全 20 地区に対して地方自治法に基づいた地域自治組織を設立している。各地区には自治振興センターと地区公民館が置かれており、地域に密着して住民主体の自治活動への協働や支援が行われている。地区公民館の制度については、住民の手によって運営される分館を土台としながら、地区公民館において分館の役員などをはじめとした専門委員会の活動と、それらの活動に対して市職員である公民館主事による支援が行われてきた（八木・荻野, 2021, p.69）。

フィールドスタディでは、飯田市公民館主事三ツ井氏をはじめとした、飯田市の地区公民館での主事経験がある職員の方々から話を伺う機会があった。公民館は、『住民自治の学校』であり、地域住民と行政職員の協働の場であるという話を伺った。飯田市で行われている市民と行政の協働によるまちづくりの中心には、公民館活動があると感じた。公民館活動では、主体性と協働性、事業を創り上げる過程が重視されている。地域住民の中には、「公民館に育てられた」と語る人もおり、公民館活動が地域の人や特徴を知るための大切な機会となっているようだ。公民館は、一般的に建物や施設のことを指すが、飯田市では公民館での活動を指す。このことから、飯田市の地区公民館が地域活動の拠点になっており、多くの世代の人々と関わることで、自己形成の場ともなっていると感じた。

3. 飯田市の地区公民館の特徴

フィールドスタディを通して学んだ、飯田市の地区公民館の特徴は、主に 2 つある。1 つ目は、高度かつ強固な地域性と自立性があるということだ。飯田市の公民館は、20 の地区公民館と 103 の分館から構成されている。公民館長や、文化、体育、広報などの委員は、市民から選出される。飯田市の公民館には、4 つの運営原則がある。①地域中心の原則、②並立配置の原則、③住民参画の原則、④機関自立の原則（飯田市, 2008）である。公民館に運営原則が定められていることに、驚きを感じた。また、飯田市の地区公民館では、この 4 つの運営原則が、忠実に守られている。このことは、今回のフィール

ドスタディを通して感じられた。①地域中心の原則については、地区公民館がそれぞれの地域のまちづくりの拠点となっており、さまざまな世代の市民の方々が利用されているように感じた。②並立配置の原則については、各地区の人口に応じて、予算が均等に配分されている。また、飯田市の職員の方々が、各地区は人口や特色は異なっても、20の地区公民館は対等な関係にあると述べられていたことが印象に残っている。③住民参画の原則については、身をもって感じる機会があった。橋南公民館でのりんご並木まちづくりネットワークの会議に参加した時だ。会議には、中学生から社会人まで幅広い世代の市民の方々が参加されていた。一人ひとりが、地域のことについて真剣に考え、それぞれが自らの活動に熱心に取り組まれていることが伝わってきた。このような会議が、定期的にそれぞれの地区公民館で行われていることは、非常に驚いた。飯田市の市民の方々は、公民館活動を通して、地域に密着した活動を行っているからか、自分事として、地域のことを捉えている市民の方が非常に多いように感じた。④機関自立の原則については、公民館そのものが一般行政からは相対的に独立した教育機関として認識され、その活動は地域住民によって主体的に企画運営されることが保障されなければならない(2011, 牧野, p.82)。飯田市の公民館主事は教育専門職として位置づけられるものではなく、一般行政職員が、教育委員会発令により教育委員会へ出向することで各公民館に配置されている(2011, 牧野, p.83)。そのため、公民館の自立性は保たれており、フィールドワークを通して、地区公民館での活動が、行政による妨げを受けているようなことは感じなかった。

2つ目は、公民館主事という立場で、飯田市の職員が配置されていることだ。飯田市の地区公民館には、公民館長や各委員会の委員に加えて、公民館主事が配置されている。公民館主事は、飯田市の職員である。先ほども述べたように、飯田市の公民館主事は教育専門職として位置づけられるものではなく、一般行政職員が、教育委員会発令により教育委員会へ出向することで各公民館に配置されている(2011, 牧野, p.83)。公民館主事という役職は、非常に難しい立場だと感じた。市民と公民館主事の距離が遠すぎるとは、市民と行政が協働した活動ができない。一方で、市民と公民館主事の距離が近すぎるとは、市民主体の活動とならない。つまり、公民館主事は、市民の「一緒にやってほしい」という願いを叶えるために、市民主体の活動に協力的であるべきだが、行政職員として活動を担い過ぎてはいけないのである。公民館主事が地域住民との関係の中で、地域課題への接近力を培い、住民とともに課題を解決する手法を身を以て体得し、それを行政へと持ち帰ることで、飯田市の行政全般が市民生活の現場への接近力と問題解決力を高めることが期待されてきた(2011, 牧野, p.83)。このように、飯田市の職員は、若手のうちに公民館主事を経験することで、地域との関わり方を学んでいくのだ。フィールドスタディでは、飯田市の職員の方々の話を伺う機会が多くあった。飯田市の職員の方々は、公民館主事を経験したことを活かして、現在の職務を果たされているようだった。公民館主事という立場を経験しているためか、市民との距離が近いように感じるが多かった。同様に、飯田市の市民の方々の話を伺う機会が多くあった。自分の地区の公民館主事だった飯田市の職員が、市役所の各部署にいることも多く、安心して行政サービスを受けられているようだった。飯田市の職員と市民の距離が非常に近いように感じた。飯田市の市民は、近い距離に行政職員がいることで、自主的に地域の活動を行う際に、非常に相談がしやすい状況になっている。一方で、公民館主事をはじめとする飯田市の職員は、地域住民との関係を保つために、会食に参加するなど勤務外での活動を大切にしているが、負担になり過ぎてはいけないとも感じた。

4. おわりに

本稿では、フィールドスタディを通して学んだ、市民と行政の協働による活動として、公民館活動を取り上げ、飯田市のまちづくりを読み解いた。飯田市の市民と行政の協働によるまちづくりの中心には、公民館活動がある。フィールドスタディを通して、飯田市の市民や職員の方々は、飯田市やそれぞれの

地域に対して、非常に強い思いを持っていることをひしひしと感じた。それは、公民館活動を中心にして、それぞれの地域で市民主体の活動が多数行われているからだと考えられる。また、飯田市の職員の方々は、若いうちに公民館主事として、各地区に配置されていたことが影響を与えているのではないだろうか。飯田市の市民と行政の協働によるまちづくりは、確立された公民館活動の仕組みと、市民と職員の方々の飯田市への強い思いにより成り立っている。飯田市の市民や職員の方々が、飯田市や自分たちのことを誇らしげに話されている姿に感銘を受けた。他の市区町村の市民や職員は、飯田市の市民や職員の方々のように、自分たちの地域をより良くしたいという気持ちを持つことが大切である。自分たちの地域をより良くしようとする気持ちを住民と行政が持つことで、飯田市のような市民と行政が協働したまちづくりを行うことができるようになるだろう。最後に、フィールドスタディのプログラムを構築し、様々なサポートをしてくれた飯田市の職員の方々と、貴重な講義をしてくれた飯田市の市民の方々に感謝を申し上げ、最終レポートとする。

【引用文献】

飯田市（2008）「飯田市公民館の運営原則」『飯田市ホームページ』（オンライン）2023年9月8日アクセス

<<https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/40/iccc01-hp005.html>>

荻野亮吾・八木信一（2021）「自治の質量とまちづくりの飯田モデル—地域自治（運営）組織への示唆として—」『佐賀大学教育学部研究論文集』5（1），193-212.

過疎問題対策懇談会（2020）「新たな過疎対策に向けて～過疎地域の持続的な発展の実現～」『総務省ホームページ』（オンライン）2023年9月8日アクセス

<https://www.soumu.go.jp/main_content/000730139.pdf>

牧野篤（2011）「開かれた自立性へ：飯田市 公民館の今後の役割と課題」牧野 篤・荻野 亮吾編『学習基盤社会研究・調査モノグラフ 2』（pp.82-101）東京大学大学院教育学研究科社会教育学・生涯学習論研究室.

八木信一・荻野亮吾（2021）「『飯田市公民館活動記録』の分析:地域自治組織設立後を対象として」『研究経済学』88（4），69-135.

今年の南信州・飯田フィールドスタディは、「行政と市民の協働による飯田のまちづくり」が全体のテーマでありました。行政からは、公民館主事経験者、企業活動からは、おひさま進歩株式会社、南信州観光公社、市民活動からは、りんご並木まちづくりネットワーク、いいだ人形劇フェスタ実行委員会、NPO 法人国際りんご・シードル振興会、NPO 法人おしゃべりサラダの方々のご講演をいただき、公民館活動や住民の自治活動が盛んな飯田市の特徴を勉強させていただきました。その中で、地域コミュニティやまちづくりの学習に際して参考となる、様々な貴重なお話をお聞かせいただきました。

飯田市の公民連携によるまちづくりには、上にあるように様々な取り組みがあることを学ばせていただきましたが、そこでは全体を通して、一つの核心的な、重要なポイントがあったことをご指摘できるかと思います。それは、行政と市民がお互いに、それとなく、ある意識を共有しているということです。すなわち、民間主体の意志から来る活動を、行政はあくまで「サポート」する立場であり、その役割分担の中でお互いがゆるやかに連帯することで、共にまちづくりを効果的に推進しようという意識が、皆さんのお話に共通していたのです。そこではまた、行政と市民の協働というよりも、行政職員も市民の一員として「ムトス」と「結」の精神を持ち、まちづくりに参加するのであるという意識を、お話されていた職員の皆さんがお持ちになっており、大変感銘を受けました。

こうした市民と、市民の一員としての行政双方の意識の共有の結果、上にある具体的な、人々が住みたいと思うようなまちづくりの活動の成果が現れているのだと感じました。この全体としての特長を踏まえまして、以下に、大きく分けて二つの「提言」をさせていただければ、と思います。

今後の飯田市のまちづくりの最大の課題の一つは、リニア中央新幹線の開通に向けた対応であるかと思えます。これについては、今回のフィールドスタディ参加者には、佐藤市長のご講演の記録映像が配布されました。その中で市長が触れられていたように、都市計画的な観点から、リニア駅付近の交流重心エリア、中心市街地付近の都市重心エリア、また、人口重心エリアの三つに分けて認識し、それぞれの機能を整理して強化していくことが、まずもって重要であるかと思われれます。とりわけ、中心市街地内のりんご並木の周辺地域をウォークブルシティとして再構築する構想も、人々が住みたいと思うまちづくりに向けた、出色の取り組みであると感じます。

その上で、しかし、リニア開通にはそれ自体、あるリスクがあることも見逃せません。上にあるような、飯田市を特徴付けている盛んな公民館活動や住民の自治活動は、りんご並木まちづくりネットワークの桑原利彦さんがご講演の中で触れられていたように、伊那谷地域の「地理的なガラパゴス性」に支えられていた側面も、あるのかもしれませんが。リニア開通は、南信州の90分圏域人口を現状の約150万人から約950万人に拡大するものであり、人口流出にも繋がり得る一方で、やりようによっては移住が促進され、交流人口も大きく増えることが予想されます。

ところが「自治」は、一般に当座、一定程度の流動性の低さや、匿名性の低さと相性が良いケースがあるかと思われれます。あるいは、今飯田に住んでいる方たちが住みたいまちと、今後交通の便が良くなった場合に飯田に住みたい（移住希望者や、二拠点生活希望者の）人たちが住みたいまちは異なり、その間でコンフリクトが生じる可能性も、ないとは言えません。これまで飯田が独自に育んできた、いたずらに都市的なものを追い求めずに、飯田の自然風土や文化や「暮らしの豊かさ」を守ろうとする視点と運動が、都市圏と行き来しやすくなる中で均され、それと平準化していく可能性も、ないとは言えません。

もちろん、喫緊の人口減少に対して、モビリティを変容させ、少なくとも当面、生産性の高い都市と

の連携を図ることもまた、求められているのでしょう。こうした状況においては、ともあれ、以下のことが求められていると考えます。

それは、今飯田に住んでいる住民自身が、飯田の特性や魅力、どのような街に住みたいかということに、一層意識的になり、リニア開通前に、そのビジョンを共有するということです。これだけでは少し抽象的に聞こえるかもしれませんが、本質的な問題として、市長が言うような「利便性」と地域の「らしさ」を兼ね備えた「上質なローカル」を、リニア開通後も飯田が目指すにあたっては「意識的な」コントロールが求められ、少なくとも、以上のようなアイデンティティの市民間での共有が、あらためて求められているのだと感じました。

上で述べさせていただきましたように、市民と行政がともに参加し、連携しながら、民間主体でまちづくりを推進する文化を、リニアの開通にあたっては活かすことが、人々が住みたいと思うような今後のまちづくりにとって重要なのではないかと考えます。ここで、行政が大きな役割を果たすハード面主体の「都市計画」と、そこに暮らす人たちの生活を支える地域社会の包括的な再構築としての、市民による「まちづくり」が、両輪で進められる必要があります。

こうした中で、具体的には、リニア開通に向けた行政と市民が共に参加するまちづくりのワークショップの開催を（行政および市民が）強化すること、その広報活動を推進すること、が肝要であると考えます。ムトスぷらざや各地の公民館でワークショップを開催することに加えて、例えば、飯田まちづくりカンパニーが関与して基本的に毎月一回、りんご並木を歩行者天国にして行っているイベントで、リニア開通を絡めたイベントを企画して行うなど、地道にみんなで話題にし、意識を高めていくことが大切なのではないか。以上が、第一の「提言」となります。

ところで、第二の「提言」に移らせていただく前に少しだけ、補足させてください。確かに、リニアの開通それ自体は、飯田という地域をどのように変容させるのか、まだ分からない部分も大きいかと思えます。実際に開通してみないと分からない、ということがたくさんあることもまた事実であると思えます。しかしながら、リニアの開通は、あるローカルな単位の地域とその外との関係を巡る問題として普遍的でもあり、この点、もとより、日本の各地域は岐路に立たされているのもある、と考えております。

今後の地方のまちづくりの最大の課題はまた、人口減少と少子高齢化への対応ですが、これに対しては、これまで、様々な手段が試みられてきました。そこでは、あるローカルな単位の地域を、その外からの支援で支えようとする運動が、一貫して見られてきたと言えます。例えば、ふるさと納税は、外からある地域に対して住民税の納税を「プレゼント」する発想から始まり、そこに返礼品という「リターン」の競争が加速したものであると言えるかもしれません。また、観光は、観光客から見た時、ある地域を外から訪れることで、その地域にお金を落とし、その「リターン」として「体験」を受け取る行為であると言えるかもしれません。いわゆる地方創生においても活用されてきた、各種のクラウドファンディングも、金銭に対する何かしらの「リターン」をインセンティブにし、地域の活動を外から支える仕組みとして機能してきました。

このような一連の運動の先で目下、新興の技術であるブロックチェーンを活用して、ある地域が発行したNFTを地域外の人々が買うことで、地域づくりの資金を提供して地域を支えるというだけでなく、地域づくりに「参加」して共に地域を創造し、ひいては、新たな都市と地方、また、地方と地方の関係を模索しようという動きが、次々に見られています。以上の文脈の中で、NFTを使った運動は、これまでの運動と比べて「リターン」から「参加」へと、双方向的な関係を強めるものへと踏み込んでいるところに、特徴があるかと思えます。

もっとも、ここで、ブロックチェーンという技術それ自体は、あくまで今活用しやすいそれに過ぎず、

本質的には、関係人口的な地域への関わり方が拡張し、いわば、地域を外へと開く、あるいは、そのローカルな輪郭をぼやかす運動が模索されている、ということが肝要なはずです。ゆえに、NFT という新興技術を利用した以上のような運動自体は、もしかすると五年後には「古く」なっているかもしれませんが、地域を外へと開くような運動の方向性それ自体は、恐らく今後も模索され、また、一時的に下火になったとしても、発想として再発見され続けるのではないのでしょうか。とりわけ、近年、喫緊の人口減少という課題の中で、現実的な策として、この運動の可能性が、本格的に議論され始めている、ということだと考えております。

こうした状況下で、やはり、各地域の現在の住民自身が、自分たちの住む地域をどのようなものにしたのか、意識的にコントロールする必要に迫られているのではないのでしょうか。上でも挙げさせていただきました、外の視点とのコンフリクトが生じる可能性、都市圏の視点による平準化の可能性、こうしたものに備えておく必要に迫られています。リニアの開通というのは、この中で、あくまで交通状況の一問題に過ぎないとも言え、本質的には、以上のような潮流そのものに対して備えておく必要がある、ということであるとと考えております。

さて、以上に関して、人々が住みたいと思うまちづくりということに関連するご提案として、第二に、以下の「提言」をさせていただければ、と思います。それは、第一の「提言」と、いわば表裏の関係にあるものです。つまり、それでは、各地域の現在の住民自身が、その地域の特性に対して意識的になり、アイデンティティと今後のビジョンを共有することは、どのように可能になるのか、という問題を巡るものです。

今回のフィールドスタディ内で、印象的なお話がありました。それは、生まれてからこれまで（大学生の期間など、地域社会にコミットする必要がそこまではないような若い年齢の時以外）ずっと飯田に住んでいる市民というのは、飯田の何が特徴なのか、本当に分からないことがある、というものでした。それは、得てして、他の地域との違いの中で、あるいは、他の地域の「目」が入ることで、はじめて浮かび上がるようなものであるから、ということでした。かくして、このような外の「目」を、どのように地域に取り入れるのか、ということを再考する必要があるのかもしれない。

上では、その外との行き来が交通上、恐らく増えることで、自然とその機会が増え、それによって発生するであろう問題があるので、それに備える、という視点で書かせていただいたのもありました。しかし、それまでに、飯田の住民の方々自身が、飯田の特性に対して意識的になることにもまた、外の「目」が必要であるのではないかと考えます。すなわち、リニア開通の、現時点で計画されている2027年までのその準備段階で、どのように外の「目」を取り入れられるのか、という課題があるのではないかと。これに関して、第二の「提言」については、具体的なアイデアを複数、挙げさせていただければと思います。

まずは、特に、この「提言」を作らせていただく機会に恵まれた、フィールドスタディ参加者の立場からのアイデアとなります。フィールドスタディ生の多くは、他県からやってくるため、自然と外の「目」を持っている、と言えます。それぞれの参加者が生まれ育ち、また、今住んでいる地域と比較して飯田を見ることができるポテンシャルを持っています。しかしながら、現状、フィールドスタディ参加者が、その参加後に、継続的に飯田と関わって外の「目」を提供する機会は、公式には用意されておりません。これを今後推進することには、可能性があるのではないかと考えます。

加えて、フィールドスタディは、それ自体にコンテンツとしての魅力がある、と感じさせていただきました。地域コミュニティやまちづくりについて、入門的に学べるというだけではなく、飯田という地域を多方面から知れるものとして、僭越ながら、非常に中身が詰まっており、多彩であると思いました。今年は「南信州・飯田フィールドスタディ」の他にも「ソーシャル・キャピタルフィールドスタディ」

と「地域経済フィールドスタディ」と「遠山郷エコ・ジオパークフィールドスタディ」が開催されているのでもあります。これらで行われた講演や、外からの「目」が混ざった対話自体を文字起こしして活用することにも、可能性があるのではないかと考えます。

それぞれ、もっと具体的に言えば、例えば関係人口をテーマにしたフィールドスタディを開催し、学生にはその後も関係人口として地域と繋がる機会を提供する、というのは面白い気がしました。また、ある年のフィールドスタディの事前講義を含めた講演と対話を文字化し、それに、中心的に関わっている大学教員のインタビューや、市役所職員の方のインタビューの記事を加えるなどして整理し、出版物にするのも面白い気がしました。それはそのまま、飯田をある程度深く知る、はじめの一冊になるのではないかと。これを仮に出版社を通して出版できれば、その反応として、自然と外の「目」が入るのではないのでしょうか。

また、以上とは別に、少しニッチではありますが、商品として、フィールドスタディですでに提供している要素をまとめて、大人向けにツアーやコミュニティを（官民連携で）提供することも、アイデアとしては考えられるかと思いました。例えば、同じく長野県の乗鞍では「NORIKURA ZERO LABO」という、勉強要素の強い、フィールドワークを伴ったコミュニティが運用されています。このような、環境や地域資源活用や観光に関心が強い層をターゲットに、フィールドスタディのノウハウや人脈を活かして、移住促進や関係人口拡大を絡めて商品を横展開することには、可能性があるのではないかと考えました。こうして学生に限らず、他地域に住む大人が外の「目」を持ち込むことを可能にするのはいかがでしょうか。

もっと言えば、学輪 IIDA を中心に、近年盛り上がりの萌芽がある「コモンズ」やローカライゼーションの議論と接続させて、一般向け、あるいは、学術向けの出版物をつくることも考えられるかもしれません。そのように、世間の関心事と突き合わせて発信することでリーチを伸ばすポテンシャルがある、と感じさせていただきました。もちろん、地域を外へと開く、あるいは、発信することそのものに、上でも書かせていただいたリスクもありますし、住民の方々の思いもあるかと思しますので、当然ながら、そう簡単な話ではないですが、以上のように外の「目」を地域外の方々に向けていただく案を、考えさせていただきました。以上が、第二の「提言」となります。

近年の地方創生の潮流、また、飯田のリニア開通という個別事情から、地域とその外との関係ということに注目して、以上のように、第一に、飯田の方々が、自身の地域のアイデンティティを市民間で共有すること。第二に、そのために、外の「目」を入れること。こう目的を整理した上で、具体的に「提言」させていただきました。外からの言いつ放しとなり、大変恐縮ですが、ぜひご参考にしていただければと思います。

【参考文献】

- 一般社団法人松本市アルプス山岳郷「NORIKURA ZERO LABO」（不明）『NORIKURA ZERO LABO』（オンライン）2023年9月7日アクセス<<https://zerolabo.info/#program>>
- 株式会社マツモト「NFTの地方創生における活用事例16選！それぞれの自治体とNFTの活用事例を紹介します」（2023年9月1日）『NFT電子の巻』（オンライン）2023年9月7日アクセス<<https://matsumoto-inc.co.jp/nft-media/nft-regional-revitalization/>>
- 小泉秀樹（2016）『コミュニティデザイン学』東京大学出版会.
- 田中輝美（2021）『関係人口の社会学』大阪大学出版会.
- 牧野光朗（2016）『円卓の地域主義』事業構想大学院大学出版部.

1. はじめに

飯田市では人々が住みたいと思う街を実現するため、住民と行政の協働によって様々な取り組みが行われている。飯田市は地域づくりの基本理念としてムトスの精神を掲げている。ムトスの精神とは自発的な意志や意欲、具体的な行動を表す飯田の地域づくりの合言葉である。また、もうひとつの基本理念として結の心を掲げている。結の心はお互いに支え合い、何かやるときは一緒になって取り組むという暖かな気持ちを表したものである(三ツ井洋樹,2023)。公民館飯田市はこれらの基本理念をもって、まちづくりをおこなっている。本レポートは、まず、飯田市で行われている街づくりを取り上げ、議論する。そして、次に飯田市における街づくりについて提言をする。

2. 住民の主体性

街づくりをするうえで重要な役割を担っているものの1つとして公民館がある。飯田市の公民館では多様な取り組みが行われている。公民館の役割として、学び合いと文化・体育活動の場をつくる、交流の場をつくる、地域の情報を発信することや、ふるさとのよさを再発見し伝える、住民自治の力を培うということがある(三ツ井洋樹,2023)。公民館での活動を通して、住民が互いに知り合い交流を深めることで、街づくりが行われやすくなっている。また、市民の方たちが小さい頃から、公民館事業などに触れ、参加することで、住民のまちづくりにおける当事者意識が育まれると考えられる。また、公民館を運営するうえで、職員が主体となってやるのではなく、市民と協働していることが大切である。飯田市の公民館では住民の方と職員の方が互いに足りない部分を補完し合っている。職員の方と住民の方の仲を深めることも街づくりをするうえで、大切である。

飯田市の観光の分野においても住民の主体性を育む仕組みが備わっている。飯田市は通過型の観光地から滞在型拠点型の観光づくりを目指しており、滞在型拠点型の観光は本物体験をすることができる(高橋充,2023)。その体験を実現することで人に影響を与えることができる。そして、その体験を実現するためには、住民の協力が必要である。住民が自身の家を民宿として提供することで成り立つ観光業であるため、住民が主体となっていると考えられる。企業だけで事業を行うのではなく住民が参加することが大切である。

3. 飯田市への提言

人々が住みたいと思う街づくりをするために、コンビニエンスストアやスーパーマーケットなど日用品や生活雑貨などを購入することができる場所を増加させることが有効であると考えられる。宗健によると、住居満足は生活利便性と正関係がある(宗健,2020,p425)。飯田市の街では地域での活動が行われる公民館や公園は十分に設置されており、交流を行うには十分な場所が確保されていると考えられる。しかし、コンビニエンスストアやスーパーマーケットなどの店の数が少ないように感じられた。生活する中で、利便性を考え時に、気軽にすることができるコンビニエンスストアやスーパーマーケットの設置数を気にする人が多く存在すると思われる。そのような店の設置を増加させ、利便性を向上させることで、より住みたいと思える街になると考えられる。

参考文献

三ツ井洋樹(2023)「飯田市の公民館について」『飯田市公民館』

高橋充(2023)「地域とともに作る本物体験 南信州観光公社の取り組み」『南信州観光公社』

宗健(2020)「地域の居住満足度と人口増減の関係」『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集
Vol55 No3』(オンライン) 2023年9月7日アクセス
https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalcpj/55/3/55_422/_pdf/-char/ja

飯田市はムトスや結いの精神を掲げて街づくりを行っているが、ここまでこの目標を達成して環境指定都市に数えられているのは稀少なことである。なぜこんなにも住民参加型のまちづくりができるのかについて疑問に感じた。その理由を私は、行政や市民関係なく楽しむことを前提とした街づくりが行われており、そこに飯田市の立地が関係しているのではないかと考える。

飯田市は都市部へのアクセスが難しく、簡単には訪れることができない。それゆえに、飯田市の中で行われる人形祭りや地元のお祭りに参加する人の割合が増え、多くの住民が地元で愛着を持ちUターンをして飯田市に帰ってくる人たちが多いのではないかと考えた。人形祭りには、老若男女問わず多くの住民が準備に参加し地元で誇りを持つ人が多いということ。また、中高生が地元で行われる大きな祭りの準備や、街づくりにかかわることができているということが彼らの誇りや、地元で貢献できているという気持ちを作っているという話もあった。昔から愛着があったり、幼いころから貢献できたりするという自覚のある地域だと、住民がより主体的な街づくりを行うことができる。また、お祭りの準備や企画を通して市民が楽しむことができ、だからこそ毎年多くの人たちが参加するのではないかと考えた。そのことが、多くの市民が街づくりにかかわることのできる町である理由なのではないかと考えた。また、公民館を通して行政と市民のかかわりを深めることも市民主体の街づくりを行っていくうえで大切なのではないかと考える。ほかの自治体に比べて飯田市はより活発的に公民館を使用している。飯田市では住民参加の住民が企画するイベントが多く行われており、多数の住民が参加している。また、そのイベントの種類は様々であり運動会から畑仕事などいろいろな年齢層の人たちが参加することのできるものである。行政と市民がかかわるのはこの時だけではなく、夜に行われる公民館の時事と地元住民の飲みながら会話するときにもかかわっており、これによって行政と市民の間できずなが生まれている。市民と行政職員である時事さんがお互いに楽しむ場を共有しているからこそ、絆が生まれるのではないかと考えた。しかしながら、住民からの話にもあったように、夜にお酒を飲むことで行政と住民のつながりを得ている。これが、お酒を飲むことのできない時事さんだったらどうなのか、時間外の労働について、時事さんたちはどう思っているのかが疑問に思った。このような公民館を通じた行政と市民のかかわりを持つことができるのも、飯田市のことを誇りに思っていたり、愛着を持ったりしている人が住民として飯田市に住んでいるからである。

私は、このフィールドスタディーを通して飯田市の住民が主体的に街づくりに参加しているのは、楽しむことを通じて住民が行政の企画するイベントに参加したり、準備を手伝ったりなどして地元で愛着を持ち、誇りを持っていくことが大きいと感じた。上記にも述べたように、疑問点や懸念点はこれからの大学生活で解決していこうと考える。

関心を持ったこと

地域での子育て支援やエネルギーの自給に関心を持った。子育て支援は飯田市だけでなく、日本全体の問題である。その一つの解として飯田市のおしゃべりサラダのようなNPO法人の活動がある。その上、子育ての問題は少子高齢化につながり、働き方にもつながることを聞き、問題の深さに気づかされた。また、エネルギー問題に関しても、小さな地域単位で生産と消費を行うという単純だが、他の地域ではあまり行われていないことの事例を知り、驚いた。

気付いたこと

飯田市は地域の人をつなぐ土台にすべてのまちづくりにつながる活動が行われている。また、行政と市民が対等な立場で協力できる制度や気風があるからこそ、やりたいことを一緒にしてくれるような人につながりができている。子育て支援のお話にあったようにまずは自発的に活動し、できない部分を行政に頼るといった姿勢が重要なのではと気づいた。そうした市民活動は、公民館活動が軸にあることでなっている。公民館の主事などの行政の近さによって自分たちが動けば行政も協力する関係が、観光や環境問題に対する取り組みなどの市民の自発な行動を自然と促しているのではないかと。

飯田市の人口などの規模やあまり頻繁ではない人の流動性がこの地域コミュニティの形成の要因になっているのではと感じた。都会のような人がすぐに入れ替わる地域では、飯田市の強固な人つながりは成立しないだろう。つまり、同じような条件である地域だと再現性があるかもしれないが、大阪や東京などの大都会では飯田市と同じ取り組みをしても、同じ結果は得られない。

まちづくりへの提言

飯田市へのまちづくりへの提言としては、住む上での魅力をより多く創ることだ。観光業や特産品も勿論まちの収入を増やすためには重要だが、持続し、開発され続けるまちになるためには、住む人にとって住み心地がよい地域である必要がある。主に暮らしに直結する仕事や子育て、教育などの分野が充実するべきだ。人形劇や子育て支援のお話の時にも飯田市での仕事があるといいと言っていた。現在では、IT業など場所に関わらずにできる仕事がある。そのような仕事をする人が増加すると、生活のために他の需要が高まるため、結果としてまち全体の仕事の増加が期待される。はじめから、雇用の増加をまちの中だけで行うことは困難であるが、会社が飯田市になくとも、働く人がいれば、他の人の働く需要が上昇する。

また、ITの活用の例として、飯田市の公民館で行われていた市民や職員との話し合いが挙げられる。現在、対面で行われているため、参加できる人が限られてしまう。そこで、ZOOMやMiroを用いることで、対面とZOOMという空間のハイブリッドで話し合いをしていくことで、普段は家が遠い人、病気で来られない人や他の地域に住んでいても飯田市との関わりを持つようになる。実際に岡崎市におけるまちづくりの一環での実験によると、従来型の対面での話し合いと同様に満足度や十分な合意形成が得られたと明らかになっている。

参考文献

伊藤孝紀ら(2023) 「まちづくりにおける対面式と非対面式を組合せたワークショップ手法の検証」
https://doi.org/10.11247/jssdj.70.1_51

私は今回、持続可能なまちづくりの実態を勉強するために長野県飯田市へ行った。初めは、持続可能なまちづくりとは何か、どのようにして市民が住みやすい街を形成しているのかわからなかった。実際に行ってみると、公民館活動や子育て支援など様々な面で市民を支援していて広い世代の人々が住みやすい町だと思った。また、「りんごん」や「いいだ人形劇フェスタ」などたくさんのイベントを年間通して実施しているので飽きのない楽しい町だと感じた。その中でも私が一番印象に残ったことは、公民館で行われた会議に参加した日である。会議室に入るとたくさんの人が集まっていて、初めは固い会議になると思っていた。しかし、その場には高校生の女の子が1人座っていた。年代も職業も異なる人たちが集まりどのように会議するのだろうと想像もできなかった。会議が、始まるとまず以前行われたイベントなどの総括が行われた。その総括で私を感じたことは、よくできた面だけでなくしっかり反省点も言い合いそれを認める雰囲気が素晴らしいと思った。そして、次のイベントへの話し合いを行った時もしっかりと自分たちがやりたいことや、どのようにしたら市民たちが楽しんでくれるのかを考えていることがたくさんのイベント成功につながっていると感じることができた。また、子育て支援の面でも関心を持つことが多かった。以前、生まれたての子供や小さい子を子育てしている親御さんは寂しく感じる人が多いと聞いた。なぜならば、小さい子供と話すことはできないし外に出ることもできない。だから、おしゃべりサラダのような場があると気軽に相談し、他の親御さんと話すことができてすごく有意義な活動だと感じた。例えば、結婚して新しい土地に引っ越してくる女性も少なくない。その場合新しい土地に知り合いなどいない上に、独身時代の友達と会う約束も取ることができなくなる。そのような悩みは経験した人にしか分かることができない。そのため、誰かが助けてくれるのを待つだけでなく自分で行動に移すことが大事なことが強く感じるようになった。私は、今まで思ってもなかなか行動に移すことができず後悔することが多かった。しかし、自分のためだけでなく、他人のために自分ができることがあるならば、率先して行動に移してみようと思った。そして、公民館に初めて行った時に人がたくさんいて驚いた。公民館という施設に入ったのが初めてでどのような場所なのかわからなかったが学生が勉強している姿やサッカーをスクリーンで鑑賞している姿がみられすごく有意義な場所だと思った。しかし、私が飯田市を訪れてみて一つ改善すればいいと感じたことがある。それは、お店のシャッターがほぼ閉まっていることである。駅の近くの町自体が、商店街みたいになっていてお店が空いていけば活気があって明るい街になるはずなのに閉まっていることで暗く感じ、街を歩くのが少し怖いと感じてしまった。もっと街が活性化すると若い世代の人が住んでみたいと思えるし地元の飯田市に帰りたいたいと思えると感じた。今回のフィールドスタディーでたくさんの人たちの話を聞いて、持続可能なまちづくりを継続することの難しさや市民と自治体が協働して町おこしを行っていることを知ることができた。自治体と市民を区別するのではなく自治体も飯田市の1人の市民としてみんなで一緒に力を合わせる事が大事なのだと感じた。それは、自分の大学生活やこれからの社会活動でも大いに活かせると思った。

地方における行政は、住民と対話を行い、自主的・主体的に行政改革に取り組まなければならない（総務省,2009）。しかし多くの自治体は、選ばれた代表者のみで話し合いが行われ、行政に住民の意見が反映されづらい。こうした中、飯田市は住民主体、住民・行政協働による地域づくりを推進しており、実際にそれらが実現できている地域であるため、近年研究対象地域として注目を集めている。本稿では、こうした背景を踏まえ、現地調査で気づいた飯田市と他の地域との自治体の相違点を述べ、その上で人々が住みたいと思うまちづくりとはどのようなものかを考える。

今回の現地調査を通して気づいた、飯田市における他の地域との相違点は、大きく分けて2つある。それは、住民が主体的に自治体活動に参加している点と、住民と行政が対等で補完関係にあるという点である。

まず1つ目の住民が主体性を持って住民自治に参加している、という点について述べる。今回の実習ではどの場面においても「住民主体」という言葉が目立った。例えば「りんご並木まちづくりネットワーク」の住民会議では、周囲の意見に流されるのではなく、個々が明確な意見を持って主体的に参加していた。また一部の世代だけがまちづくりを担うのではなく、幅広い世代を巻き込んで行っている印象であった。「おしゃべりサラダ」の松村さん話からは、子育てに足りないと感じたサービスを行政に訴えるのではなく、住民自らが主体性を持ち行動を起こしていることがわかった。

次に2つ目の、住民と行政との間に補完的關係・信頼關係が成り立っているという点について述べる。飯田市を除く日本全国の地域をみると、地域住民と行政職員との間に対立關係が生じている自治体は少なくないと思う。実際に内閣府による世論調査（1964）では、「あなたは、県（都道府）や市（区町村）のやっている仕事について、要望や不満を持っていますか」という質問に対して、40.2%の人が「持っている」と回答した。一方で、飯田市における市民意識調査（2007）での「市役所の職員の対応に満足していますか」という質問に対して、「不満」と答えた人はわずか20.5%であった。実習の講義では、「住民は自分たちに今何が必要なのか、何に困っているのかを提案する役割であり、行政はそれに必要なものや資金を考える役割である」と述べられていた。また、飯田市は独自の制度である「公民館活動」を取り入れることで、住民と行政職員との距離を縮めていた。これらのことから、飯田市は日本に多く見られる住民と行政の上下構造とは違い、住民と行政がそれぞれの役割を理解して活動を行っていることが分かる。そのため、住民が行政に対する不信感や敵対意識を持つことが少ないのではないかと考える。

本稿では、実習を通して気づいた飯田市に見られる他地域の相違点として、住民が主体性をもって自治活動に臨んでいる点、住民と行政が互いに補完しあい、信頼關係が芽生えている点の2点を論じた。これを踏まえて、人々が住みたいと思うまちづくりとは、1人1人の意見や要望が尊重される仕組みを確立することであると思う。住民は、困っていることを自ら声に出し、行政は住民の意見を聴く姿勢やそれを取り入れようとする姿勢を持つことが重要である。この仕組みが確立することで、誰もが住みやすいまちとなり、また住み続けたいと思えるまちになると考える。今後は、飯田市における住民主体のまちづくりシステムをどのようにして他地域に応用していくか、またどのようにしてそのシステムを持続させていくのかということが課題である。

【参考文献】

総務省（2009） 「地方自治制度」 『総務省ホームページ』（オンライン） 2023年8月15日アクセス

<https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/bunken/>

内閣府（1964） 「自治意識に関する世論調査」 『内閣府ホームページ』（オンライン） 2023年8月17日アクセス

<<https://survey.gov-online.go.jp/s39/S39-11-39-06.html>>

飯田市（2007） 「平成19年度市民意識調査の結果について」（オンライン） 2023年8月17日アクセス

<<https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/19ishikityousakekka.html>>

1. 飯田市の街づくりの在り方

本レポートは、長野県飯田市のフィールドスタディで得た知識をもとに、人々が住みたい街づくりについて、自身の考えを述べたものである。

はじめに、飯田市の街づくりの特徴を述べていく。飯田市は、20の地区が集まり各集落が、自主的に街づくりに貢献するムトスの精神やお互いに助け合い街の人々と協働する結の精神をもとに街づくりに励んでいる（三ツ井, 2023, p.3）。このように、住民が主体となり、住みたい街づくりを目指している。加えて、公民館などを運営している行政はその手助けとなり、住民に寄り添い活動の支援を行っているのである。具体的な活動内容として、20地区に公民館、自治復興センターを残し、それぞれの場所に行政職員の派遣をするといった活動を行っている（櫻井, n.d., p.4）。そこで、住民達が集まり、運動会や子育て支援学級などを行う中で、行政職員も住民の一員として行事に参加をし、住民が本当に必要としていることは何か住民と同じ目線で学んでいる。このような協働活動を行うことにより、住民達が住み続けたい街づくりが行えていると考えられる。よって、飯田市の街づくりのゴールは明確にあるのではなく、日々成長を遂げていることがわかる。

2. フィールドスタディで得た興味・関心

次に、実習を通して、自身が興味・関心が湧いたものを取り上げる。第一に、住民の協働意思の強さである。実際に、飯田市民と行政の方が集まり、開催している公民館会議に参加させてもらった際、幅広い役所や年齢層が集まっていることがわかった。地方テレビ局の方から、一般の市民、高校生など様々な方がいる中で、行事を行なった時の様子やそれに対する問題点・解決策などの議論が行われていた。一人一人が行事に対して気になった点などの意見を述べ、より良い街に変革していこうとしている姿からムトス精神を感じることができた。このように、実際に会議に参加することで住民それぞれの街に対する意見を分かち合えることに加えて、行政の職員も会議に参加をしているため、住民が必要としている援助が的確にできる利点があることに魅力的を感じた。よって、人々の繋がりが深いことで困った時の助け合いや住民一体となって住みたい街づくりを行なっていることが結果的に少子高齢化や環境問題などの街の問題解決に繋がっているのではないかと感じた。

3. 人々が住みたい街づくりとは

上記から、この飯田市フィールドスタディを通して、人々が住みたいと思う街づくりにおいて最も重要な点は、その地域に住んでいる住民が第一となり、様々な活動ができる場所が設けられていることである。また、そのような活動に住民の参加率を高める工夫が必要であるといった2点である。総務省（2017, pp3-6）によると、公民館の数は年々減少しており、利用者が減少していることが読み取れる。また、公民館の活動内容として、教養の向上が多くを占めており、レクリエーションや市民意識などの講座を含む活動はあまり行われていないことが現状である（総務省 2017, p7）。このことから、分かるように現代の人々は地域の活動に興味関心が少なくないことが原因とし、各公民館が地域に根付いた活動などを開催しても人々が集まらないのである。その結果、レクリエーションなどの活動は減少し、地域をより良いものに変革したいと考える人々の減少に繋がっていると考える。そこで、これからの継続的な公民館活動の参加を推し進めるため、ターゲットを幼少期に絞り、子供の頃から地域の活動に参加させることが必要であると考え。幼少期からの地域活動参加は、地域の活動の認知度を高めることに繋がる上、地域の活動が普遍的活動として受け入れることができるのでは

ないかと考えられる。

事例として、京都で行われており歴史的文化である地蔵盆が挙げられる。この活動は、地域住民が自立的に行なっている文化活動であり、年に一回ではあるが地域内でのコミュニケーションが行われている。参加者は、子供から大人まで幅広く、地域内での結の精神を強めるものとなっている。よって、日常的にも住民間でのコミュニケーションが行われる利点へと変容し、地元住民が集まり、花火を一緒にしたり、子育ての悩みを相談したりできる機会提供となっている。地蔵盆のように、地域の活動の一部として普遍的なものにすることにより、地域の活動への参加増加や結の精神を強めることができ、地域に興味関心を持つ人が増えるのではないかと考えた。そして、Uターンしたい地元として住みたい街に変わることができると思う。

よって、はじめに地域の繋がりを強めてくれる公民館の活動が日常のものとして住民に浸透するため、幼稚園や小学校で開催イベントの宣伝を行うことが大切であると思う。そして、幼少期の頃からイベントに参加をし、継続して楽しい思い出を作れる公民館と認知され、地域住民の集まりを絶やすことなく人々の繋がりを強くできるのではないかと考える。加えて、子ども達が地域のイベントに参加をすることにより、自然的に子供の両親世代などにも活動内容が浸透し、地域に対して興味関心を持つ人が増加するのではないかと感じた。このように、活動ができる場所の提供だけではなく、住民のムトス精神を育てるための地域活動への参加呼びかけなども大切であると思う。

4. 考察

このように、住民が住みたい街づくりを作り上げていくためには、はじめに、結の精神の育成を行い、その後ムトス精神を行政との協力をもとに築き上げていくことが大切であると感じた。ただ単に、住民達が自由に活動できる場所を提供するのではなく、その場所を最大限に利用してもらうための工夫を行なっていく必要がある。第一歩として、行動範囲が狭く、地域内でよく遊ぶ子供をターゲットとし、地域がどのような活動をしているかなどの講演や体験を小学校などの教育現場を利用し、行なっていくことが必要ではないかと感じた。長野県飯田市のように、住民の繋がりを強め、行政と一体となることで自主的に街での活動を行なっていくことができるようになるのではないかと考える。そして、最終的に人々が住みたい街を作り上げることができるのではないかと考える。

参考文献

櫻井毅 (n.d.) 「長野県飯田市の取組から」『長野県飯田市総合政策』オンライン, 2023年8月28日アクセス

< https://www.chisou.go.jp/sousei/meeting/kankeijinkou/h31-04-09-shiryoushiyou2_1.pdf >

総務省 (2017) 「公民館の現状と課題」『文部科学省生涯学習政策局社会教育課ホームページ』オンライン, 2021年9月1日アクセス

< https://www.soumu.go.jp/main_content/000513104.pdf >

三ツ井洋樹 (2023) 「飯田市の公民館について」『飯田市公民館』オンライン, 2023年8月28日アクセス

< <https://docs.google.com/presentation/d/1U9WwvVXXXvztYMDp8qPtKfzBQBhFXAd/edit#slide=id.p1> >

今回のフィールドスタディでは、実際に飯田市に赴いて役所と住民、双方の声を聞く機会を得ることが出来た。実際に飯田市に赴く前は環境モデル都市や地域作りといったことはほかの都市も目指しているため、飯田市の何が特別なのかよく理解していなかった。大学で事前学習を受けていた際にはある程度、飯田市の特異性を知ることができた。しかしこの行政の施策に対して住民はどう思っているのかなどの疑問が残った。住民が自分の仕事とは別の公民館の会議になぜ出ているのか、娯楽に溢れている現代でそれよりも魅力があると思わせる公民館のレクリエーションとは一体どういうものなのか。座学では知ることが出来ないものを今回、目で見て確かめようと思った。

初日には公民館がどのような仕組みで動いているのかとうことを公民館主事の人の話を通して知ることができた。まずほかの自治体と違うと感じたことは主事というポジションがあることである。主事は行政と市民の間に立つ存在として機能しており、双方の意見を聞いて自治で行う行事を円滑に機能させる役割を担っている。飯田市には行政の立場でやれること、市民の立場でやれることはこれ、という分別はない。そのため行政と市民は対等に意見を出し合うことができる。行政職員は市民と同じ意識をもって街づくりをしているため市民目線での対応が取れるという。また、情報共有がされていないことに対しての一部の反発があったようだが、それに対して飲みに行くなどプライベートでも信頼関係を築く行動を取っている。主事という立場の人が市民に寄り添ってプライベートの時間を共有することはなかなかほかの地域では見られない。なぜ市民が街づくりに積極的なのか疑問にあったが、主事や行政職員が同じ立場にいることを考えると市民も積極的になれるのかもしれないと感じた。街づくりはそこに暮らしているすべての人に関わりがあるため、行政職員と市民の壁を作らずにいる飯田市の策はいいことだと思った。ほかの地域に応用することは、その土地特有の人柄に左右されてしまうかもしれないため難しいことかもしれない。この主事と市民の関係が成り立ったのも飯田市がもともと持っていた、結いの精神の影響が強いのだろう。

また、実際の会議にお邪魔した際に印象的だったことがある。何人もの役職についている大人に囲まれながら意見を出している高校生の姿が特に印象に残った。イベントを考案して実行する高校生は多いが、実際に大人と同じ立場で意見できる人は少ない。イベント周知のためにも大人たちに意見を求め、イベント含めお祭りを成功させようとする気概が素晴らしいと感じた。私が東京で高校生活を送っていた頃は、イベントを立ち上げたり起業をしている高校生同士の集まりなどがあったため、刺激にもなり参考にもなった。そうした高校生の集まりを飯田市側でサポートするのも面白いかもしれない。普段 SNS で他地域の高校生とやりとりを取っているだろが、イベントを開催することで違う環境下で話すことができいい刺激になるだろう。

ここまで飯田市の街づくりで感じたことを挙げてきたが、一番感銘を受けたのは「文化はアイデンティティ」という言葉である。幼いころから飯田市の文化に触れることで、大人になって自分の地元を説明するときに役立つはずである。地元の文化に参加することで地元へ愛着も湧き、団体に属することで新たな居場所を見つけることが出来る。文化を継承していくためにもこの考えは非常に大切である。

今回のフィールドスタディを通して分かったことは、制度の面でほかの地域も導入できる場所があると思うが、それ以上に精神やマインドのところではほかには真似ができないところがあると感じた。この根本的なところを変えるのは簡単ではない。だからこそ時間をかけてでも住民ひとりひとりが自分の街と向き合うことが大切だと感じる。

【参考文献】

飯田市（2022）「飯田市自治基本条例」『飯田市ホームページ』（オンライン）2023年9月2日アクセス
<https://www.city.iida.lg.jp/reiki_int/reiki_honbun/e706RG00001039.html>

1. 「まちづくり」と「都市開発」

実習初日に問い立てを行った際、「まちづくりと都市開発の違いは何か」という問いを立てた。今回のフィールドスタディ参加前までは、その二つの言葉の意味を混同して捉えていたためである。フィールドスタディでの実習を終え、自分の中では、「まちづくり」は「市民が幸せに暮らせる環境づくり」であると定義した。飯田市のあらゆる取り組みにおいて、市民や行政職員が「楽しむこと」を大事にしており、それが持続可能性につながっていると気づいたからである。さらに、インフラなどのハード面よりも、助け合いの心や地元をより良くしたいという思いなどをはじめとした、精神的な面での豊かさを向上させることが「まちづくり」であるという共通認識があるようにみえた。一方、「都市開発」は「利便性の高い都市環境を作ること」と定義した。都市開発では、単に物質的豊かさを追求し、まちづくりとは対照的に、ハード面の向上を重視しているように思われる。

近年よく「まちづくり」という言葉を耳にするのは、これまでの都市的な物質的豊かさの追求から、地方的な精神的豊かさの追求へと、社会的に価値観の転換が起こってきていることの表れであると考えられる。このような傾向を踏まえると、飯田市で行われている取り組みの中で、「楽しむこと」が重視されているのも、価値観の表れで、飯田市はその実践の先駆的存在であるといえる。

2. なぜ住民と行政の協働による市民活動が盛んなのか

実習の中で、飯田市では公民館活動をはじめとして、様々な市民活動が盛んである現状を体感することができた。しかし、特に都市部では、そのような地域住民主体の活動はほとんど行われていない。そのような地域と比べ、飯田市は、「飯田」の語源にもなっている「結い」の精神と、飯田市の合言葉である「ムトス」という「～しようとする」行動意思や意欲を大切にしており、その二つが組み合わさる仕組みが整ったため、市民活動が盛んであると考える。自分なりのこれらの言葉の意味の理解を平易な言葉で表すと、「結い」は「助け合い」、「ムトス」は「課題意識と地元への愛着」である。これらと「楽しむこと」の3つの要素が合わさることで、飯田市の取り組みは市民の主体性と持続性を発揮することができていると考える。その結果、飯田市民であることや取り組みを行っているということ自体が、市民のアイデンティティになり、シビックプライドが醸成されるという流れが生み出されている。

3. 飯田市の市民活動の課題

実習の中で、飯田市は市民と行政の協働による市民活動が活発であるということ強く理解したが、唯一、環境分野における取り組みに関しては、市民「主体」の活動というよりも、行政の取り組みに市民が「参加」していると感じた。この背景には、高齢化の進む飯田市では、環境意識が比較的強い若者の人口が少ないため、市民側から環境的な取り組みが起こりにくいためであると考えられる。消費者庁(2022)によると、消費行動における環境配慮活動を表す言葉である「エシカル消費」の認知度は20代が最も高いのに対し、70代以上が最も低いという調査結果がある。また、環境問題自体が身近に危機を感じにくい問題であるため、課題意識(ムトス)を活動源とする飯田市の市民活動とは相性が悪いように見受けられる。さらに、日本で広く流布している環境への取り組みは「我慢を強いる個人努力」(的場ほか, 2021, p.209)が必要である、というイメージが先行し、環境への取り組みによって「生活の質を向上させ、様々な便益をもたらす、社会的課題の解決につなげる」(的場ほか, 2021, p.209)ことが可能になるという認識が薄いことも、理由のひとつではないだろうか。これらの理由により、「市民の思い」を起点とした飯田市の市民活動は、取り組みの分野に偏りが出ていることが、課題であると考えられる。

4. 「住みたいまち」にするために

飯田市のまちづくりは、全体を通して、「住民ニーズに基づき地域の課題を地域主導で改善・解決していく活動」(的場ほか, 2021, p.136) で、ボトムアップ型のまちづくりであるといえる。また、遠山郷の中山間地政策での取組(飯田市ゼロカーボンシティ推進課, 2023)からもわかるように、異なる分野の政策を関連付けることで、「一石二鳥三鳥のマルチベネフィット」(的場ほか, 2021, p.139)の獲得を目指している点で、現代の複合的な課題に対する取り組みとして理想的なまちづくりであると感じる。しかし、環境分野に関していえば、市民への環境意識の醸成は未熟であるように見受けられ、教育の機会が少ないが人口の多数を占める高齢者へのアプローチを増やす必要があると考える。具体的には、最も身近な生活習慣のひとつである消費行動から、環境配慮行動を意識できるよう、環境配慮商品の販売店舗を誘致するなどがあげられる。

5. 今後の課題

今後は、飯田市のような山間地域だけでなく、私自身の地元である大阪府豊中市のような、いわゆる都市に隣接する「ベッドタウン」や、在住中の大分県別府市のような観光資源を大切にしている観光都市など、状況や大切にしているものが異なる地域において、飯田市の取り組みがどのように生かせるのか考えていきたい。また、前章でも述べたように、市民が課題意識を抱き難い分野や問題に関して、どのように市民の主体性を引き出し、持続的な取り組みを生み出すかについても研究したい。

参考文献

飯田市ゼロカーボンシティ推進課(2023年8月11日)「クリーンエネルギーで『結い』の力を再生」
『飯田フィールドスタディ資料』

消費者庁(2022年12月22日)「令和4年度第3回消費生活意識調査について」『消費者庁ホームページ』(オンライン)2023年9月8日アクセス

https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_research/research_report/survey_003/assets/survey_003_221222_0001.pdf

的場信敬ほか編(2021)「エネルギー自立と持続可能な地域づくり：環境先進国オーストリアに学ぶ」
『龍谷大学社会科学研究所叢書』135, 1-247.

「飯田市の街づくりへの提言」

立命館アジア太平洋大学4年 西村 仁

1.はじめに

今回のフィールドスタディでは、現地での学習を通じて、飯田市におけるさまざまな地域振興策や環境活動への取り組みの一端を拝察させていただき、飯田市ならではの地域力を感じることができた。2007年には「環境文化都市宣言」を行っている街自体の雰囲気はとても和やかで、車通りも中心部は頻繁にあるが、歩行者に対する思いやりを感じられる運転をする方が多かったのが印象的であった。夜間の時間帯には、繁華街とまではいかないものの、昼間とはまた異なる活気を感じられる街であった。特に、市民と行政が一体となった歴史ある公民館活動や街づくりネットワーク、人形劇等伝統的な文化の継承など、講義とフィールドワークを通じて、飯田市の強みを学ばせていただくことができた。

本稿では、飯田市の概要をまとめた後、現地での学びやグループメンバーとのディスカッション、プレゼンテーションを経て、飯田市のこれまでの街づくり政策と、その中から見えてきたいくつかのポイントを抽出した。飯田市の街づくりの原動力である「結い」の精神に基づく多方面における街の工夫や地域住民の方々によるローカルコミュニティという相互扶助の考え方は、持続可能な地域社会構築のために大いに学ぶべきところがある。そこで、今回は、飯田市の強みを活かした「気候変動への適応策」、「人形劇」の2点にターゲットを絞り考察の上、自身の考える「飯田市の街づくりへの提案」を述べていくこととする。

2.長野県飯田市の概要

この章では、飯田市の概要について、市の誕生の歴史と変遷、人口、地理、気候、産業、エネルギーの6つの側面から見ていくこととする。

2.1.飯田市の歴史と概況

以下は、飯田市誕生の歴史と変遷である。

- | | |
|----------|--------------------------------|
| 1937年4月 | 飯田市誕生（飯田町と上飯田村が合併） |
| 1956年9月 | 7村と合併（座光寺、松尾、竜丘、伊賀良、山本、三穂、下久堅） |
| 1961年3月 | 川路村と合併 |
| 1964年3月 | 龍江村、千代村、上久堅村と合併 |
| 1984年12月 | 鼎町と合併 |
| 1993年7月 | 上郷町と合併 |
| 2005年10月 | 上村、南信濃村と合併 |

このように、飯田市は数度の合併を繰り返し、形成されてきた。現在は20の地区によって構成されている。

図1



出典：Google Earth

図 2



出典：南信州・飯田 FS 事前学習_資料 PPT (p.3) より、筆者編集

総務省 (n.d.) の資料によれば、飯田市は伝統的に学びと文化を大切にしている街である。厳しい気候と地理的な条件から、農業だけで生計を立てるのが困難な地域であったため、厳しい環境を生きるために「学び」を重視し、昔から知恵や工夫で乗り越えてきたという。江戸時代には寺子屋がつくられ、明治時代の自由民権運動においては教育運動が盛んであったといわれている。歴史的に「学び」と「文化」を重んじる土地柄が、現在にも継承されている。公民館を中心に先進的な学びを取り入れた市民と行政の協働関係と、住民による主体的な地域活動が、脈々と展開されてきている。市街地においては NPO 活動も活発化している。文化的には、神楽や人形浄瑠璃など民俗文化が今なお地域住民の暮らしの中に根付き、継承されてきている。それらは専門的な人々による継承だけでなく、地域住民の生活の中に根差し、受け継がれてきた。公民館、地域の神社、小学校などでも催されている。

飯田市は、人口・面積で南信州最大の市であるため、観光事業においても南信州の中核都市として「南信州観光公社」を設立し、農村体験型の企画などで成果を上げてきている。市の木は「りんご」であり、飯田市出身の田中芳男氏が、日本にはじめて西洋りんごを持ち込んだことが由来である。また、現在では、焼肉の街としても有名で、人口 10 万人あたりの焼肉店舗数が日本一であり、駅からすぐ近くには「信州飯田焼肉研究所」という焼肉文化発信の拠点も存在する。将来的には、リニア中央新幹線が開通予定であり、東京まで 45 分、名古屋まで 25 分で移動が可能となる立地となっている。

写真 1 信州飯田焼肉研究所外観



写真出典：飯田経済新聞 (2022.11.30 付)

写真 2 リニア駅前広場_デザイン模型



写真出典：筆者撮影 (2023.08.11)

飯田市は、環境への意識が高く、行政・地域住民が一体となって 1990 年代から多様な環境施策が継続的に実施されてきている。2022 年には、飯田市と中部電力の共同提案が環境省の「脱炭素先行地域」に指定され、2050 年二酸化炭素排出実質ゼロ（いいだゼロカーボンシティ宣言）に向けて、「地域マイクログリッド構築によるレジリエンスの向上」、「太陽光発電及び蓄電池の積極導入」、「学校における脱炭素社会を担う人材育成」等に取り組んでいる。

2.2.飯田市の人口状況

飯田市の総人口は、96,662 人(2023 年 4 月末)となっており、うち、外国籍の人は 2,169 人(約 2.2%)となっている。総世帯数は 40,297 世帯であり、最小地区である上村地区は人口 357 人、最大地区の伊賀良地区は人口 14,110 人である。合計特殊出生率は 2020 年現在 1.64 であるが、これは同年の全国値 1.33 を上回っている(南信州・飯田 FS 事前学習資料)。住みたい田舎ベストランキング(宝島社, 2023)では、総合部門 1 位(人口 5 万人~10 万人未満都市)にランクされている。

しかしながら、高齢化率は 33.0%と非常に高く、2022 年 4 月 1 日時点の全国値 29.0%を大きく上回っている。持続可能な地域を目指して、飯田市では 2006 年から「人材サイクル」という循環を目指し、「帰ってこられる産業づくり」、「住み続けたいと感じる地域づくり」、「帰ってきたいと考える人づくり」に取り組んでいる。同時に 2006 年度から人材誘致事業として「結い(=UI)ターンキャリアデザイン室」を設置し、暮らしを支え合い、人と人を結び、知育力によって、一旦都会に出た若者が、飯田に誇りと愛着を持って「帰ってきたい」と思える人材サイクルの構築を目指している。

2.3.飯田市の地理的特徴

飯田市は、美しい山や水に恵まれ、古くから陸運や天竜川の水運にも恵まれており、地理的特徴から、東西・南北の交通の要衝として繁栄してきた。本州のほぼ中央、長野県の最南端に位置している。東に南アルプス、西に中央アルプスがそびえ、南北に天竜川が貫く日本一の谷地形が広がっており、豊かな自然と優れた景観を擁する地域である。標高は 400 m(天竜川)~3,013 m(聖岳)と高低差があり、面積は 658.66 km²である。84%が森林という大きな特徴がある。動植物の北限・南限が交差しており、地理的に日本の東西文化が融合する位置にある。

2.4.飯田市の気候状況

飯田市の気候の特徴は以下のとおりである(南信州・飯田フィールドスタディ事前学習資料)。

- 平均気温 13.5℃ (2021 年)
- 日照時間 2068.9 時間 (2021 年)
- 年間降水量 2190.5mm (2021 年)

2.5.飯田市の産業

飯田市のウェブページ(2021)によれば、飯田市は経済的にも文化的にも独自の発展を遂げてきている。「飯田」の地名の由来は「結いの田」が語源となっている。「結び」に縁のある伝統産業である水引は、全国シェア 70%を占める。その他、歴史的には養蚕など伝統産業により発展してきている。

現在では、先端技術を導入した精密機械、電子、光学のハイテク産業をはじめ、半生菓子、漬け物、味噌、酒などの食品産業、市田柿、りんご、なしなどの果物を中心とする農業なども盛んに行われている。天竜川沿いでは稲作、段丘では果樹栽培が行われている。菓子作りは、江戸時代から始まったと言われている。明治初期には駄菓子、その後ムシ菓子が作られるようになり、「半生菓子」は昔ながらの伝

統を受け継ぎながら、戦後の高度成長期に開花し、昭和 30 年代に「栗しぐれ」の大ヒットに伴って、「飯田の半生菓子」のシェアは大きく伸びた。現在は全国シェア約 40%を占めるまでになっている。

観光産業においては、「りんご並木」、「人形劇のまち」としても国内における知名度は高い。天龍峡をはじめ、天竜川の川下り、元善光寺、しらびそ高原などの風光明媚な名所もある。近年では（コロナ禍前）、地域住民積極協力による体験教育旅行や、銘桜を巡る桜守の旅、グリーンツーリズム・エコツーリズムの取り組みなどが、全国から注目を浴びている。

2.6.飯田市のエネルギー状況

United Nations Climate Change (2022) の「NC8 隔年報告書」によれば、日本の気候変動適応策のひとつに「地方自治体と市民の取り組みによる社会の再設計」というのがある。「脱炭素化」「循環型経済」「地域社会の再構築」への転換がキーワードとなる。白井 (2022) は「石油や石炭、原子力等といった市民が制御しきれないエネルギーに依存するがゆえに、エネルギーは市民の手を離れ、中央政府や専門家、大企業など見えないところに依存せざるを得ない状況」であったと述べている。すなわち、それぞれの地域が、住民主導の地域エネルギーの生産・共有・消費というエネルギー自治に取り組むシステムが広がっていくことこそが、望ましい日本のエネルギー政策の要のひとつとなる。

飯田市は 1996 年から、環境と地域活性化を両立させる施策を取り入れている。2004 年には、公共施設の屋根の目的外使用（20 年間にわたり無償で使用できる）を許可し、全国初の太陽光発電による電気の全量を市が固定価格で買い取る「固定買取価格制度」を導入している。

2009 年には、内閣府より「環境モデル都市」に全国 13 都市（当時）のうちの一つとして選定されている。2011 年には、エネルギーの地産地消に向けて、再生可能エネルギー利用のシンボルとなる施設として、中部電力と共同で 1 MW 太陽光発電施設「メガソーラーいいだ」を設置し、災害による停電時等には同一配電系統内における自立運転を可能とするための蓄電設備を導入している。このような地域マイクログリッドの活用は、既存の配電系統を用いるため、新たな設備投資や維持管理コストが発生しないというメリットがある（飯田市ゼロカーボンシティ推進課, 2023）。飯田市は、日照時間が長いという気象条件もあり、現在、一般家庭においても、持ち家住宅における太陽光発電の設置率は 17.8%まで普及が進んでおり、全国平均（10%）を大きく上回っている。

一方、日本政府は、風力、水力、地熱、バイオマスなど、太陽光発電以外の様々な再エネ普及拡大を支援する目的で、2012 年に「固定価格買取制度」を導入したが、小林 (2023) は「このことにより、大手資本による地方への大規模ソーラー発電所の進出があり、場所だけ提供して収益は全部大手資本に持っていかれてしまうといった、地方活性化には到底つながらない状況が全国で相次」いだと分析している。さらに、そのために飯田市では、固定価格買取制度からの収益を地域課題の解決に生かすべく、2013 年に「地域環境権条例」（再生可能エネルギー資源から生まれるエネルギーを市民共有の財産と捉え、市民がこれを優先的に活用して地域づくりを行う権利）を制定したと述べている。同時に、市は住民への金融面での支援として、初期投資にかかる資金調達を基金から融資するという施策をとっている。住民自治による再生可能エネルギーの地産地消に早くから着目していた飯田市は、「エネルギー自治先進都市」として、環境省より「脱炭素先行地域」の選定を受けている。しかしながら、飯田市の「地域環境権条例」の目的は、単に再生可能エネルギーを導入すればいいということだけでなく、再生可能エネルギーを普及しながら活力ある持続可能な地域づくりを目指すことにあるとされている（小林, 2023）。

図2 飯田市におけるエネルギー自治の年表（段階別）

段階	具体的な取組み	関与の主体
第1段階 発電事業を担う主体の離陸	1997年 住宅用太陽光発電設置への融資斡旋と利子補給開始 2002年 「自然エネルギーネット山法師」設立、活動拠点となる「風の学舎」の整備 2004年 「おひさま進歩エネルギー」の設立、「明星保育園」への「おひさま発電所」1号の設置（寄付型）	・市行政 ・住民（設置者）
第2段階 公共施設での市民共同発電事業の創設	2004年 市民共同発電事業の公共施設への全市的展開（環境省「まほろば事業」の活用） 2006年 市民共同発電の電力が持つ環境価値を「グリーン電力証書」として、第三者に販売開始 2006年 グリーン熱供給事業（経済産業省「グリーンサービサイジングモデル事業」）	・市行政 ・民間企業（発電事業者） ・住民（設置者、出資者、学習者）
第3段階 公民協働による市民共同発電事業の展開	2009年 「おひさま0円システム」による住宅用太陽光発電の全市展開（個人住宅対象） 2011年 飯田市と中部電力との連携による「メガソーラーいいだ」開始 2012年 「メガさんぼプロジェクト」による非住宅用太陽光発電の全市展開（工場等対象）	・市行政 ・民間事業者（発電事業者、設置者、融資者） ・住民（設置者、出資者、学習者）
第4段階 条例の導入による地域自治主導の取組みの強化	2013年 「飯田市再生可能エネルギーの導入による持続可能な地域づくりに関する条例」の施行 2014年 山本地区の斜面地を利用した太陽光発電所が再エネ条例により認定 2015年 旭ヶ丘中学校の太陽光発電所が再エネ条例により認定 2016年 上村地区での「かみむら小水力株式会社」の設立、2018年に再エネ条例により認定	・市行政 ・地域自治組織 ・教育機関（中学校） ・民間事業者（発電事業者、設置者、融資者） ・住民（設置者、出資者、学習者、自治組織構成員）
第5段階 地域新電力の設立など	2018年 飯田まちづくり電力株式会社の設立 2021年 「2050年いいだゼロカーボンシティ宣言」 2022年 上郷地区の「野底川小水力発電所」の建設（市民出資）	・市行政 ・地域自治組織 ・教育機関（小学校、中学校） ・民間事業者（発電事業者、設置者、融資者） ・住民（消費者、設置者、出資者、学習者、自治組織構成員）

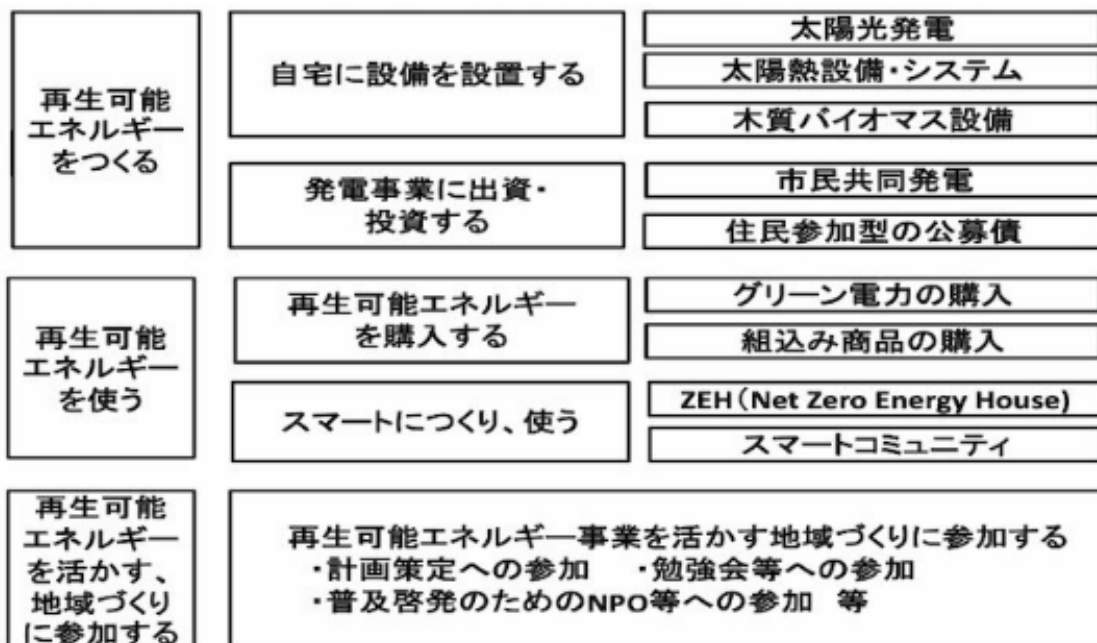
出典：白井信雄（2022）「SDGs と地域活性化 # 1 エネルギー自治先進都市・長野県飯田市の事例を考える」

図3 飯田まちづくり電力株式会社における SDGs 貢献型の割引

	子育て応援割引	UI ターン移住応援割引
割引	毎月の電気料金 2年間 1,000円割引	毎月の電気料金 2年間 1,000円割引
対象	契約時に3歳未満の子どもを持つ世帯	契約時に指定市町村へ UI ターンをして定住意志のある世帯
必要書類	母子手帳、健康保険証などお子さまの生年月日が確認できる公的書類	世帯全員の住民票
適用期間	2年間	2年間

出典：白井信雄（2022）「SDGs と地域活性化 # 1 エネルギー自治先進都市・長野県飯田市の事例を考える」

図4 住民の再生可能エネルギーへの関与の選択肢



出典：白井信雄（2022）「SDGs と地域活性化 # 1 エネルギー自治先進都市・長野県飯田市の事例を考える」

このように、飯田市では、歴史的な公民館活動による住民自治の力を活かし、行政・地域住民・市民団体・民間企業等が一体となった「再生可能エネルギーの普及と持続可能な地域づくり」への取り組みを推進している。

3.飯田市の今後の街づくりへの提言

この章では、これまで見てきた飯田市の歴史や概況を基に、飯田市が今後行っていく街づくりについて、自身が考える同市の強みを活かした住民自治による「気候変動への適応策」と「人形劇」の分野に絞り、その戦略提案について述べていく。

3.1.気候変動への適応策に関する提案

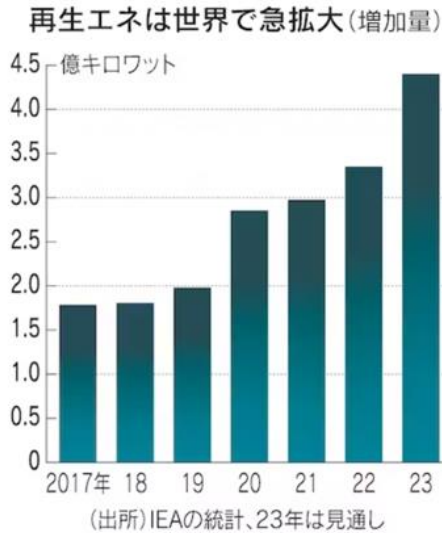
「21'いいだ環境プラン みんなで目指そう 6つのゴール」の「ゴール5」に焦点を当てた。飯田の歴史的な公民館活動に見る持続可能な住民自治のローカルな地域連携力を継続しつつ、よりグローバルな視点からのヒントを積極的に採り入れ、「グローカル」な取り組みを推進していくことを提案したい。具体的には、気候変動への適応策としての「再生可能エネルギー技術の更なるイノベーションと最先端技術の積極採用」や、「林業におけるデジタル技術やサプライチェーンの効率化施策による女性やシニア、外国人材の積極活用」を提案する。

3.1.1. 再生可能エネルギー技術の更なるイノベーションと最先端技術の積極採用

日本経済新聞（2023年7月28日付）の報道によれば、世界気象機関（WMO）と欧州連合（EU）の気象情報機関「コペルニクス気候変動サービス」は、2023年7月の世界の平均気温が観測史上で最高となる見通しだと発表した。猛暑が人々の健康や経済に与える影響への懸念が一層強まっている。WMOが発表したデータを受け、国連のグテーレス事務総長は「地球温暖化（グローバル・ウォーミング）の時代は終わり、地球沸騰化（グローバル・ボイルング）の時代がきた」と警告した。日本にとっても、

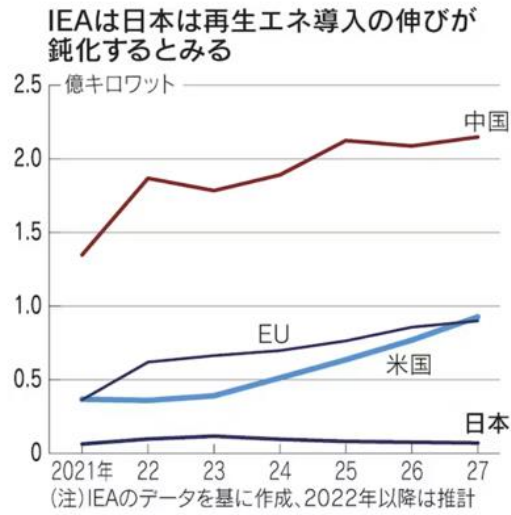
エネルギーの安定供給と脱炭素社会実現との両立を目指し、日本経済を再び成長軌道に乗せていくことが、最重要課題のひとつとなっている。政府も国を挙げて「GX 実現に向けた基本方針」を取りまとめているが、地方においても、行政と地域住民との協働により、産官学一体、異業種連携を含め、長期的な視野と戦略にもとづく総合力の発揮が必要となっている。日本には、高度な脱炭素関連技術やノウハウもある。しかしながら、現状、日本全体で見た場合、欧米等先進諸国に比べれば、既成概念の変革におけるスピード感に関しては甚だ疑問が残る。

図 5



出典：日本経済新聞（2023年6月1日）

図 6



出典：日本経済新聞（2023年2月10日）

欧州連合（EU）においては既に、2022年、再生可能エネルギーの発電量が史上初めて天然ガスを上回ったとされている。また、米国では、太陽光、風力、水力の合計が初めて石炭を超えたとされている。したがって、日本のエネルギー状況の主な特徴としては、「低自給率」「化石燃料高依存」「再生可能エネルギー普及鈍化」という3つが挙げられる。

近年、日本においても気候変動にともなう台風や豪雨、熱波などは、災害級に激甚化することが多くなってきている。気候変動の状況を指数化して、その変化を把握する取り組みが、北米やオーストラリアなどで行われているようであるが、下記のグラフは、ニッセイ基礎研究所研究員による、日本の気候の極端さを定量化したものである。これは、7つの各項目と、それらの合成の計8項目について、1971年から2000年の30年間を参照期間とし、標準偏差を求め、それぞれの値がどれくらい標準偏差から乖離しているかを求めて、指数化したグラフである。

図 7 気候指数－日本の気候の極端さは1971年以降の最高水準

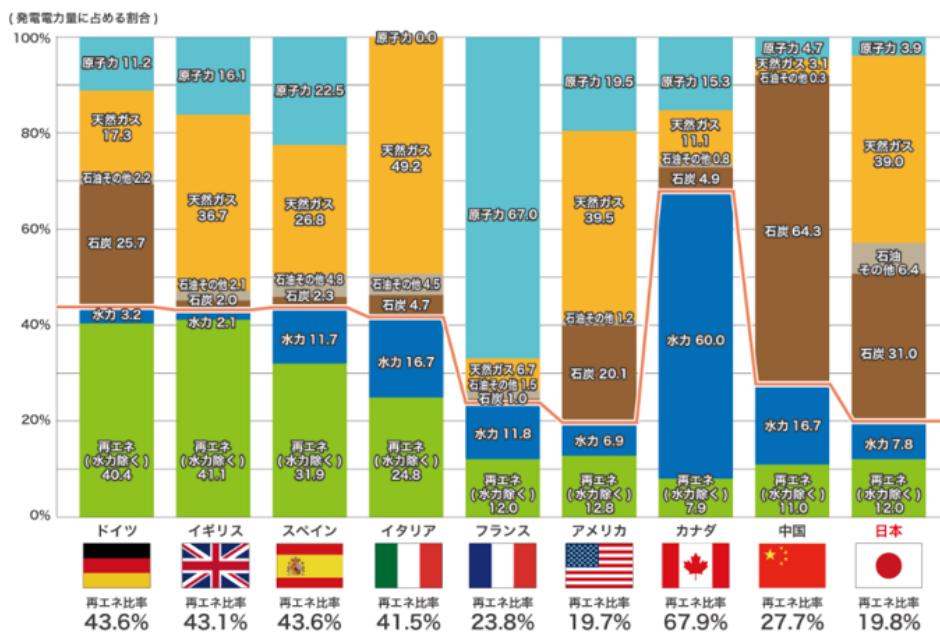


出典：篠原 拓也（2023）ニッセイ基礎研究所

これによると、日本全体の合成指数（気温・降水・乾燥・風・湿度・海面水位、それらを合計した黒のライン）は、参照期間の1971～2000年には、ゼロ前後で推移、2000年代には、0～0.5の範囲内で変動、2010年代に入ると極端な上昇傾向となっている。この水準は、1971年以降の過去最高水準であると報告されている。気候変動により、人々の生活に深刻な影響を及ぼし始めているということが、このグラフからも読み取れる。

そのような中、飯田市が、再生可能エネルギーに関しても、住民一体型の地方自治による取り組みに早くから着手している試みは、他地域が学ぶべきところが非常に多い。日本におけるモデル地域として、更なる推進を目指し、積極的に海外事例の視察に出向く等、変化の早い技術革新分野における諸外国の取り組みを参考にしつつ、政府への提言も行っていくことを提案したい。例えば、米国カリフォルニア州は、既に2022年の時点で、電力供給源の97.6%を再生可能エネルギーが占めたと報告されている（Taft, 2022）。また、以下、主要国の発電電力量に占める再エネ比率の比較を見ると、日本の課題が浮かび上がってくる（IEA, 2021）。

図8 主要国の発電電力量に占める再エネ比率の比較

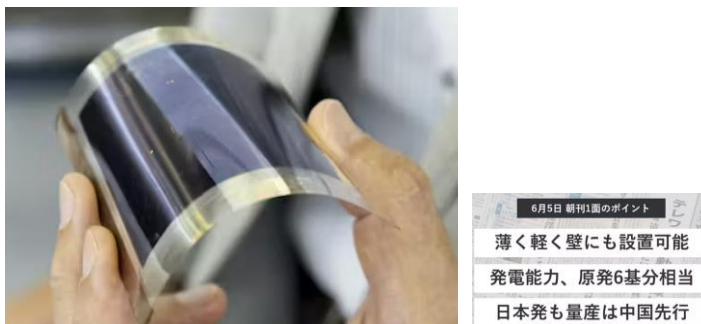


出典：IEA「Market Report Series – Renewables 2021（各国2020年時点の発電量）」

IEAデータベース 総合エネルギー統計（2020年度確報値）等より資源エネルギー庁作成

加えて、飯田市がイノベーションの発信地となるべく、実証実験地として土地や人財を提供することにより、最先端技術の誘致を図ることを提案したい。かつて日本は、従来の太陽光パネルの開発において、世界で50%のシェアをとっていた。しかしながら、中国企業が国からの補助を受けるなどして、低価格で量産、現在では8割超のシェアを取ることとなり、日本勢の多くは撤退を余儀なくされている。2023年6月5日付の日本経済新聞の報道によれば、G7が、4月の気候・エネルギー・環境相会合で採択した共同声明において、「ペロブスカイト太陽電池などの革新的技術の開発を推進する」と記されたとのことである。共同声明において具体名が盛り込まれたのは初めてであったと報じている。この「ペロブスカイト太陽電池」というのは、薄くて軽く、曲げられる特徴を持ち、価格も従来のシリコン型と比べ、半分程度と言われているのだが、これは、日本の研究者である宮坂力氏が発明したものである。これは一例であるが、このような最先端技術の実証実験地として名乗りを上げ、地域専門人財との協働で開発を行っていくことを提案したい。

写真3 ペロブスカイト型の太陽電池は薄く、壁などに貼ることができる。



出典：日本経済新聞（2023年6月5日）

写真4



積水化学工業のペロブスカイト型太陽電池の壁面設置のイメージ=NEDO提供

出典：日本経済新聞（2023年4月3日）

3.1.2 林業におけるデジタル技術やサプライチェーンの効率化施策による女性やシニア、外国人材の積極活用

飯田市環境基本計画「21'いいだ環境プラン」第5次改訂版（2021年度～2024年度）によれば、「ターゲット 5-5 森林整備による吸収源の確保」にて、「計画的で適切な森林整備を行うこと（間伐による吸収源を確保する）」や、「里山を保全する」といった内容が記されている（長野県飯田市 市民協働環境部環境課・環境モデル都市推進課, p.26）。ムトスの精神で、計画に基づき森林資源が循環するよう整備を行うことにより、飯田市の地理的特徴でもある豊富な森林を最大限活かし、適切な二酸化炭素吸収量の確保が期待できる。

林業従事者が生きがいを持って働ける魅力ある林業へと転換するために、考え得る必要な措置として、以下を提案する。

- ▶ デジタル技術の活用
- ▶ 高齢者や女性、外国人材等多様な人材を活かせる人事制度と賃金制度
- ▶ 中小・零細事業者をつなぐ組合一丸となったサプライチェーンの強化

まずは「デジタル技術の活用」についてである。例えば、DIAS (Data Integration and Analysis System) 等、地球環境の観測情報や予測情報などのビッグデータを蓄積・統合解析し、地球規模課題の解決に資する情報システムとして開発されたデータ統合・解析システムなどの活用である。このようなシステムを林業に活かしていくことで、より働く人にとって安全、かつ、効率的に活動ができるようになることが期待できる。

図 9 DIAS: Data Integration and Analysis System

データ統合・解析システム



出典：United Nations Climate Change (2022). Japan. National Communication (NC). NC 8. Biennial Reports (BR). BR 5.

図 10

(参考3) DIASに格納されている主なデータセット

大気、陸域、海洋、人間圏などに関する多様な観測データや気候変動予測結果を格納。

種類	主なデータセット
衛星観測データ	ひまわり8号、だいち (ALOS) 衛星 (地形データ等)、しずく (GCOM-W) 衛星 (降水量、水蒸気量、海上風、海面水温、土壌水分量、積雪深等)、TRMM衛星 (降雨情報等)、AMSR-E/AMSR2 (水蒸気量、降水量、海面水温等)、MODIS (植生指数等)、NOAAほか
現場観測データ	気象観測データ、流域観測データ (国土交通省河川テレメータ (河川水位、雨量、ダム諸量等)、Cバンドレーダー (広域リアルタイム雨量)、XRAIN (詳細リアルタイム雨量))、海洋観測データ (船舶、ブイ等)、地域気象観測システムデータ (AMeDAS)、気象庁測候所データほか
予測データ	統合地球エネルギー・水循環観測プロジェクト (CEOP) プロジェクトデータ、気象庁全球数値予報モデル GPV、長期予測 CMIP3/CMIP5、予測、地球温暖化対策に資するアンサンブル気候予測データベース (d4PDF) ほか
再解析データ	気象庁 JRA-25/JRA-55、ECMWF ERA-Interim、NCEP再解析データ、NASA再解析出力データ GLDAS、JAMSTEC 全球海洋再解析 (4D-VAR) ほか
その他	全球都市域マップ、全球バイオマスデータセット、大気汚染物質排出インベントリ、津波アーカイブ、水害統計 GIS データ、市民参加型データベース (蝶、マルハナバチ、生物データ)、全球降水マッププロダクト (GSMaP) ほか

※この他、JAMSTECデータカタログ (海洋研究開発機構)、JaLTERデータ目録 (生態系観測データベース)、NIPR (国立極地研究所学術データベース)、ADS (国立極地研究所北極域データアーカイブ) とデータベース連携
 ※また、上記データセットについては、一部の期間や座標等を限定して格納しているデータがあります。
 ※運用状況、データ提供機関の状況により、上記表に反映しきれていない変更がある可能性があります。

出典：文部科学省 研究開発局 環境エネルギー課 (2018)

次に「高齢者や女性、外国人材等多様な人材を活かせる人事制度と賃金制度」についてであるが、多様な人材も、デジタル技術を活用することにより、林業事業により長く従事してもらうことができるようになるはずである。また、賃金制度については見直していく必要がある。林野庁 (2023) によれば、林業従事者の年間平均給与は全産業より 100 万円程度少ないというデータがある。「生きがいを持って働ける魅力ある林業」を目指すのであれば、業界全体の適正な賃金アップは必要不可欠な施策である。IoT を活用し、生産性の向上が図れれば、不可能なことではないと期待できる。競争力のある賃金

上昇が実現すれば、広告せずとも外国人材は必然的に集まってくるものと思われる。育成環境も整え、国内外からの魅力的な産業となるよう期待したい。

図 11



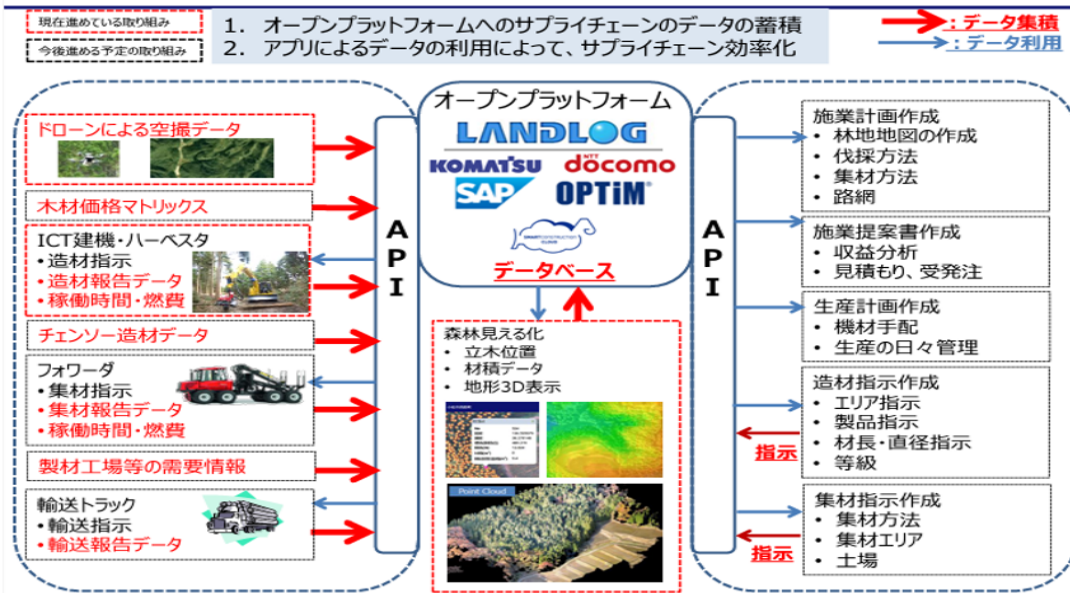
出典：コマツ（2018）

3つ目に「中小・零細事業者をつなぐ組合一丸となったサプライチェーンの強化」についてである。IoTを活用し、機械や運搬を協働で行うことにより、労力・コストともに効率的なサプライチェーンを構築することが可能となる。例えば、以下は、コマツの機械を使った林業サプライチェーンの一例である。

図 12



出典：コマツ（2018）



出典：コマツ（2018）

同様な施策は既に採られている部分もあるかと思うが、気候変動への適応策のひとつとして、飯田市の強みを活かす戦略で、飯田の地の利を活かした森林というリソースに着目し、飯田の国産材を国内外に広めていくことを提案したい。良質な国産木材を建築物や家具、アートなどで利用することで、炭素を長期間貯蔵することもできる。そして、その森林を活かすための林業従事者が、生きがいを持って働ける魅力ある林業へと転換するために、「デジタル技術の活用」「高齢者や女性、外国人材等多様な人材を活かせる人事制度と賃金制度」「中小・零細事業者をつなぐ組合一丸となったサプライチェーンの強化」を提案した。

3.2.人形劇

飯田市ウェブページ（2013）によれば、人形浄瑠璃が飯田市に伝えられたのは、今から300年前と言われている。多くの人たちが旅の一座から人形遣いを教わり、やがて様々な祭りへと結びつき、現代へと伝承されてきたのである。伝統芸能の宝庫である飯田に、いいだ人形劇フェスタの前身「人形劇カーニバル飯田」が生まれたのが1979年国際児童年の年である。全国から人形劇を愛する人たちが飯田に集まり、市民を巻き込んで人形劇のお祭りへと発展した。1986年には、本格的な国際人形劇フェスティバル、ウニマアジア会議が初めて開催され、人形劇カーニバルの国際化が広がった。1988年ウニマの本部があるフランスのシャルルヴィル・メジエール市との友好都市提携をし、飯田市は人形劇を通じて国際交流都市となったのである。

その後、1999年に、市民がつくる人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」が生まれた。地域の文化がさらに高まり、街も活性化するような祭りを飯田市は目指している。「みる・演じる・ささえる わたしがつくる トライアングルステージ」が、いいだ人形劇フェスタの理念である。2008年には、人形劇の街30年を記念し、9日間にわたる「世界人形劇フェスティバル」が市民によって開催された。

「いいだ人形劇フェスタ」は誰でも参加できる日本最大の人形劇の祭典である。コロナ以前は、毎年8月上旬、飯田市と周辺の約130会場で、400ステージ以上の人形劇の公演が開催された。国内外300以上の劇団が集結し、2,000人を超える市民がボランティアとして参加、多くの企業や団体が協賛し、行政がそれを支援している。

人形劇フェスタ 実行委員会 実行委員長 原田氏によると、若い世代は「やりがい」や「居場所」の

ために取り組んでいるといった声もあるという。さらに、人形劇のこころとは、すべてのものに「いのち」を見出すところであり、みる側、演じる側、双方の想像力で「いのちの交歓」を分かち合う場であるという。豊かないのちのわかちあいと、それを支えるたくさんの絆、無数に繰り広げられるいのちのつながり、その一つひとつが大きくつながりあう場が「人形劇フェスタ」なのであると述べられていた。

いいだの人形劇のこころをさらに壮大な「世代を超えた縦のつながり」と「国境を越えた世界という横のつながり」に広げていくために、伝統と最先端の技術との融合を提案したい。具体的には、以下の2点を挙げる。

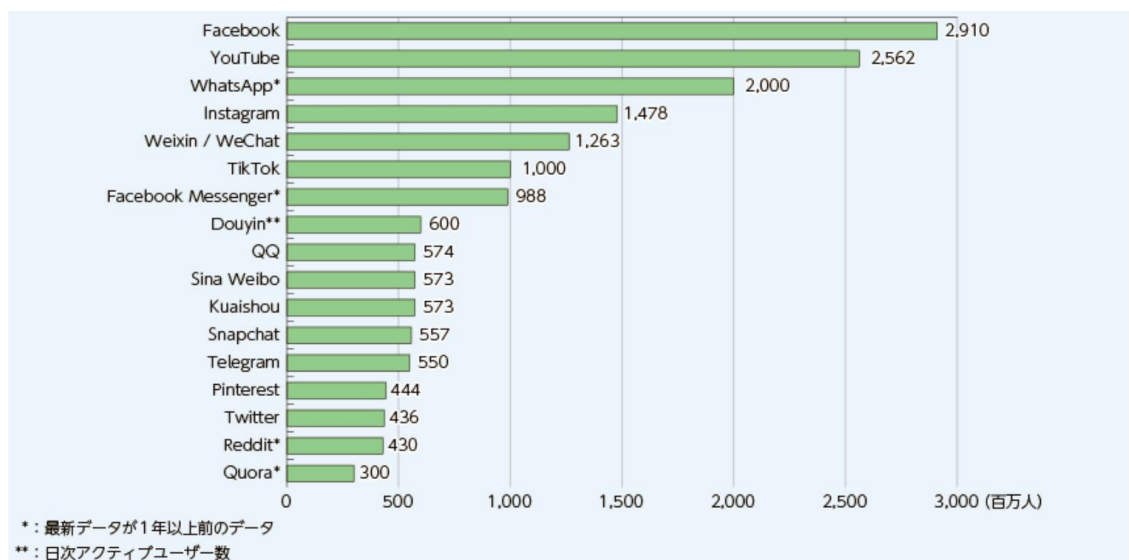
- AR 技術を活用した日英を含む多言語対応
- YouTube を活用した人形劇各演目導入部分の世界配信

今後、より多くの人に人形劇を楽しんでもらうためには、まず、日英両言語のみならず、多言語での対応が求められる。今後さらに同時通訳機能を備えた AR 技術が進展していくものと思われるため、最先端技術を伝統芸能と融合し、活用できれば面白いと考えている。実際の人形劇の演者が、複数言語を習得することは現実的ではないが、リアルタイムでの自国言語での翻訳機能があれば、フェスタにおいてのみならず、観光事業としても幅広く活用できるはずである。

また、アーカイブとして YouTube のような動画サイトに掲載する際、サイトに搭載されている自動翻訳機能にとどまらず、演者が伝えたい微妙な言葉のニュアンスや、飯田市における人形劇の歴史や理念、住民自治の取組みや想いなどのストーリーも交えてコンテンツを制作し、各国言語の字幕で世界の視聴者が閲覧できるようにすることは、実現可能性が高く、飯田市を世界に知ってもらうための PR 方法のひとつであると言えるであろう。また APU の 100 ヶ国超の留学生達とコラボする、あるいは、インターンとして受け入れ、SNS を活用し、各演目導入部分を世界配信してみることも面白い試みではないかと考える。

以下は、「令和4年版 情報通信白書」より「世界の主要 SNS の月間アクティブユーザー数」をまとめたグラフである。

図 14 世界の主要 SNS の月間アクティブユーザー数（2022 年 1 月）



出典：総務省「令和4年版 情報通信白書」

飯田の伝統的な人形劇を市民の想いととも、世界のより多くの人々にぜひ知ってもらいたいと率直に感じた故の提案である。

4.街づくりへの提言のまとめ

今回は、「飯田市の街づくりへの提言」として、飯田市の強みを活かした戦略に焦点をあてた。「結い」の精神に支えられた伝統的な公民館活動の成果に基づく市民自治型の ①気候変動への適応策、②人形劇、の2つにターゲットを絞り考察してきた。これまで見てきたように、飯田市の気候変動適応対策としては、「再生可能エネルギー技術の更なるイノベーションと最先端技術の積極採用」ならびに「林業におけるデジタル技術やサプライチェーンの効率化施策による女性やシニア、外国人材の積極活用」を、人形劇の発展的な取組み施策としては、伝統と最先端技術を融合し「AR 技術を活用した日英を含む多言語対応」と「YouTube を活用した人形劇各演目導入部分の世界配信」を提案してきた。今後、住民主導の光るアイデアや技術を育てられるかどうかは、アイデアや技術を商品化するときのマーケティング力の発揮も重要となるであろう。

地球における気候変動は、待ったなしの状況にある。環境・経済・社会の一体的改善のためには、地域資源やデジタル技術を活用し、経済活性化、雇用創出、地域課題の解決、SDGs の達成に貢献する政策を推進していくことが急務である。デジタル技術をフル活用すること、そして、再生可能エネルギー主力電源化のため、再生可能エネルギー関連商品の量産体制を支援し、規模の経済でコストを下げること、なるべく地産地消、マイクログリッド化を図ることなどが求められている。飯田市がムトスの精神で、地域住民と協働で推進のスピードを加速させていくことによって、他地域の一步先に行くモデル地域であり続けることを期待したい。ひとりひとりの意識と行動の変革を促進させていくことが重要であり、必要に応じて計画を柔軟に見直していくプロセスを、産官学一体、かつ、地域住民を巻き込んで進めていくことこそがもっとも重要な政策であると考えている。

フィールドスタディを通じて、飯田市がこれまで、環境文化都市の理念のもと、地域の持続性を高め、新たな価値創造の創出に取り組まれてきた姿勢を垣間見させていただくことができた。今回は、将来へ向けての「飯田市の街づくりへの提言」として、同市の強みに焦点を当て、「気候変動への適応策」と「人形劇」の2点に絞って提案をさせていただいた。本来ならば、これ以外の飯田市の多分野における魅力的な街づくりへの理解を更に深めた上で、時間を掛けて調査をし、評価すべきであると考えている。今回のみでは飯田市の包括的な街づくりの取組みにまでは触れることができなかつたため、今後の自身の課題としたい。また、飯田市での「結い」と「ムトス」、「住民自治」による取組みは、自身がゼミで担当している他県における課題解決へのヒントにもつながると考えている。ご教示いただいた飯田の皆様、この場を借りて心から感謝を申し上げたい。

参考文献

飯田市 (2015) 「飯田市の概要」 2023 年 7 月 8 日アクセス

< <https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/160/iidagaiyou.html> >

飯田市 (2015) 「飯田市の面積と位置」 2023 年 7 月 8 日アクセス

< <https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/160/iidamenseki.html> >

飯田市 (2018) 「飯田市森林整備計画」 2023 年 8 月 21 日アクセス

< https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/life/55923_127591_misc.pdf >

飯田市 (2013) 「人形劇の街飯田の歴史」 2023 年 8 月 21 日アクセス

< <https://www.city.iida.lg.jp/site/puppet/puppettowniida-his.html> >

飯田市市民協働環境部環境課・環境モデル都市推進課 (2021) 2023 年 8 月 21 日アクセス

< <https://www.city.iida.lg.jp/uploaded/attachment/49469.pdf> >

飯田市ゼロカーボンシティ推進課 (2023) 「IIDA 環境ブランド Reborn クリーンエネルギーで「結い」

の力を再生」

Google Earth (n.d.) Data S10, NOAA, U.S. Navy 2023年9月1日アクセス

経済産業省 資源エネルギー庁 (2023)「日本のエネルギー2022年度版」2023年8月21日アクセス
<<https://www.enecho.meti.go.jp/about/pamphlet/energy2022/007/#section1>>

経済産業省 資源エネルギー庁 (2023)「企業の脱炭素化をサポートする「トランジション・ファイナンス」とは? (前編) ~注目される新しい金融手法」2023年8月21日アクセス
<https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/transition_finance.html>

小林晋 (2023)「長野県・飯田市地域環境権に基づく再生可能エネルギーの普及」『月刊「住民と自治」2023年7月号』2023年8月21日アクセス

<<https://www.jichiken.jp/article/0336/#:~:text=%E3%81%9D%E3%81%93%E3%81%A7%E7%99%BA%E9%9B%BB%E3%81%95%E3%82%8C%E3%81%9F%E9%9B%BB%E6%B0%97,%E3%81%AB%E5%8F%96%E3%82%8A%E7%B5%84%E3%82%93%E3%81%A7%E3%81%8D%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82>>

コマツ (2018)「コマツが目指す日本のスマート林業 (IoT を活用したサプライチェーンの効率化)」2023年8月21日アクセス

<<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/miraitoshikaigi/suishinkaigo2018/nourin/dai9/siryoushiki2.pdf>>

篠原拓也 (2022)「気候指数 [全国版] の作成ー日本の気候の極端さは 1971 年以降の最高水準」ニッセイ基礎研究所 2023年8月21日アクセス

<<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=74427?pno=3&site=nli>>

白井信雄 (2022)「SDGs と地域活性化 地域での実践紹介編」2023年8月21日アクセス

<<https://sdgs.kodansha.co.jp/news/knowledge/40677/#section-1>>

総務省 (n.d.)「飯田市 (長野県): 地域資源を総合的に活用した都市農村交流及び人財誘導 [若者の UI ターン支援]」2023年8月21日アクセス

<https://www.soumu.go.jp/main_content/000063236.pdf>

総務省 (2022)「令和4年版 情報通信白書」2023年8月21日アクセス

<<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r04/html/nd236200.html>>

宝島社 (2023)「第11回 2023年版 住みたい田舎ベストランキング」『田舎暮らしの本 2023年2月号』2023年8月21日アクセス

<<https://inakagurashiweb.com/archives/24881/5/>>

Taft, M. (2022)「再生可能エネルギーがメインになる日も近い? 米国でいいニュースが続々」GIZMODO 2023年8月21日アクセス

<<https://www.gizmodo.jp/2022/04/good-news-related-to-renewable-energy.html>>

日本経済新聞 電子版 (2022年2月10日)「日本の脱炭素投資、米の6分の1 再生エネ出遅れ」2023年8月21日アクセス

<<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA08C2F0Y3A200C2000000/>>

日本経済新聞 電子版 (2023年6月1日)「再エネの発電能力、化石燃料に匹敵 世界で5割規模へ」2023年8月21日アクセス

<<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGR0105H0R00C23A6000000/>>

日本経済新聞 電子版 (2023年6月5日)「貼る太陽光発電、覇権争い日本発の技術でも量産は中国 第4の革命カーボンゼロ 再エネテックの波 (1)」2023年8月21日アクセス

<<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUC152LO0V10C23A2000000/>>

日本経済新聞 電子版 (2023年6月5日)「貼る太陽電池ペロブスカイト型、何がすごい？」2023年8月21日アクセス

<<https://www.nikkei.com/article/DGXZQODL0426P0U3A600C2000000/>>

日本経済新聞 電子版 (2023年7月28日)「今月「最も暑い1カ月」国連総長「地球沸騰の時代」世界平均 世界気象機関など予測」2023年8月21日アクセス

<<https://www.nikkei.com/article/DGKKZO73131400Y3A720C2EAF000/>>

文部科学省 研究開発局 環境エネルギー課 (2018)「データ統合・解析システム (DIAS : Data Integration and Analysis System) 2023年8月21日アクセス

<https://www.soumu.go.jp/main_content/000540281.pdf>

United Nations Climate Change (2022). Japan. National Communication (NC). NC 8. Biennial Reports (BR). BR 5. Retrieved July 12, 2023, from

<https://unfccc.int/documents/624736>

林野庁 (2023)「令和4年度 森林・林業白書 概要」2023年8月21日アクセス

<https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/hakusyo/r4hakusyo/gaiyou.html>

APPENDIX

